

2019年度 卒業論文

蘭嶼島における社会秩序変容がもたらした変化
-ヤミ族の主体性と伝統文化の発展を対象として-

慶應義塾大学総合政策学部
71505969 所めぐみ

はしがき

本研究は、台湾の離島、蘭嶼島に古くから住むヤミ族を対象として、彼らが経験した社会秩序の変容が、彼らの主体性と伝統にどのような変化をもたらしたのかを考察したものである。蘭嶼島に古くから住むヤミ族（タオ族）は、1877年の清朝政府、日本政府、現在に至る中華民国政府による統治と、外から課される新しい社会システムによって、暮らしから価値観に及ぶ様々な変化を余儀なくされてきたと言われている。今回は蘭嶼島で蘭嶼の伝統工芸品を売る一部のヤミ族に焦点を当て、彼らの主体性とヤミ族の伝統の発展が、上記の社会秩序変化の中でどのように生じているのかを明らかにした。工芸品を販売する彼らは主に戦後始まったヤミ族の台湾本島への出稼ぎから蘭嶼島に一時的に出戻りしている者だった。彼らは台湾本島での出稼ぎを通じ、労働競争の波に飲み込まれる過程で近代的な暮らしを経験した。この経験は、彼らに意識的な変化をもたらした。蘭嶼を一つの単位として捉え始めるとともに、自己としての主体性が生まれた。そのそれぞれの主体性が最終的に彼らを工芸品販売へと突き動かし、彼らが思う蘭嶼の伝統を、工芸品を通じて観光客に売り始めたのである。彼らの主体性が蘭嶼の伝統を選び、更新し、人々に記憶され、保存されていく。

無論台湾から持ち込まれた近代的な社会システムや考え方が蘭嶼ヤミ族に支配的な構造で影響を与えているものの、実際に現地へ赴きミクロな現実を観察すると、観光などの中華民国政府からもたらされた社会変動の波に乗り、自分の生活に役立てている様子が伺えた。

この研究を支援してくださった山岸学生プロジェクト支援には、この場を借りて心より感謝申し上げます。

キーワード：蘭嶼島、ヤミ族、近代化、出稼ぎ、主体性、伝統、工芸品

目次

序章

0-1. 研究の概要	4
0-1-1. 研究の背景	4
0-1-2. 研究の対象と方法	4
0-1-3. 研究の先行研究	5
0-1-4. 論文の構成	6
0-2. 蘭嶼島の概要	6
0-2-1. 蘭嶼島の環境	6
0-2-2. 蘭嶼島での暮らし	7
0-2-3. 蘭嶼ヤミ族	9
0-2-4. まとめ	11
第 1 章 ヤミ族外部接触の歴史	13
1-1. 島に訪れる様々な来訪者とヤミ族の関わり	13
1-1-1. 来訪者たちと彼らが残したもの	13
1-1-2. 統治国家別の整理	13
1-1-2-1. 清朝統治時代前	13
1-1-2-2. 清朝統治時代	14
1-1-2-3. 日本統治時代	14
1-1-2-4. 中華民国統治時代	16
1-1-3. 「外部」の認識	19
1-2. 島外へ出るヤミ族と台湾人	21
1-2-1. 戦後の台湾本島への出稼ぎヤミ族	21
1-2-2. 出稼ぎの経緯とヤミ族の台湾本島での生活	21
1-2-3. 「蘭嶼」の認識	23
第 2 章 文化接触から生じる主体性の変容	24
2-1. 伝統工芸品を売るヤミ族の出現	24
2-2. 工芸店経営ヤミ族のライフヒストリーと変容の実態	24
2-3. 文化接触がもたらした変化	27
第 3 章 出稼ぎヤミ族が担う蘭嶼の伝統文化	29
3-1. 伝統工芸品店の実態	29
3-1-1. 工芸品店の概要	29
3-1-2. 工芸品店の担い手と商品	29
3-1-3. 門戸としての機能	30
3-2. 伝統とは何か	31
3-2-1. 記憶され残される伝統	31
3-2-2. 工芸品店ヤミ族が伝えること	31
3-2-3. 伝統の変容に対する見解	34
終章 まとめ	35
参考文献	36
謝辞	38

序章

0-1. 研究の概要

本研究は、台湾の離島、蘭嶼島に古くから住むヤミ族を対象として、彼らが経験した社会秩序の変容が、彼らの主体性と伝統にどのような変化をもたらしたのかを考察したものである。蘭嶼島に古くから住むヤミ族（タオ族）は、1877年の清朝政府、日本政府、現在に至る中華民国政府による統治と、外から課される新しい社会システムによって、暮らしから価値観に及ぶ様々な変化を余儀なくされてきたと言われている。今回は蘭嶼島で蘭嶼の伝統工芸品を売る一部のヤミ族に焦点を当て、彼らの主体性とヤミ族の伝統の発展が上記のような社会秩序変化の中でどのように生じているのかを整理し、考察する。

0-1-1. 研究の背景

私をはじめて蘭嶼島を訪れたのは、2018年の3月下旬であった。台東から蘭嶼へ向かう飛行機は12名乗りで、その飛行機には台湾本島へ出稼ぎから帰島するヤミ族も乗り合わせており、観光客の私は異色の存在だった。エコツーリズムの要素が強いことで有名な蘭嶼島での観光を楽しむにしていた私は、そびえ立つ山々や透明度の高い海と対峙し、高揚感を覚えた。3月の蘭嶼は観光のオフシーズンで、この時期に観光客がいることは珍しいようだった。島民も私を不思議な眼差しで見つめていた。しかしたまたま露店を営んでいるヤミ族夫婦とは他の原住民と全く違う目線を向けてきたことが印象的だった。露店に立つヤミ族は、私のような観光客に対し笑顔で接客し、装飾品や衣服、フルーツジュースなどを製作・販売していた。それぞれの商品には観光客用のディスコースが用意されており、記述され保存されてきたヤミ族の文化と異なったものや、特定の文化のみを切り取りアレンジしたものがあつた。島で見かける他のヤミ族とは異なった彼らの態度に興味を持ち、彼らを突き動かした主体性の実態と、彼らが売るヤミの伝統について研究をしたいと考えた。同年8月、1週間のフィールドワークをするべく、に蘭嶼島に向かった。

0-1-2. 研究の対象と方法

本研究の対象は2018年の8月31日から9月5日にかけて、蘭嶼島でヤミの伝統工芸品を製作・販売していたヤミ族、もしくはヤミ族×台湾人の夫婦である。

本研究の調査方法は主に文献調査、統計調査、インタビュー、参与観察である。量的な調査としては、蘭嶼島と外部が交流した歴史を具体的に明らかにする為、文献を整理するとともに、統計調査も用いて考察した。質的な調査としては、インタビューと参与観察から、伝統工芸品を製作・販売するヤミ族に対して、彼らのライフヒストリー、現在の暮らし、彼らの商品に関するこだわりなどから、彼らの主体性の変容と彼らが商品として販売する彼らにとってのヤミの伝統とは何かを探った。インタビュー内容は以下の通りである。

○構造化インタビュー内容

(1)性別(2)年齢(3)出身部落(4)母国語(5)家族構成(6)教育(7)出稼ぎの有無(8)職業遍歴

○半構造化インタビュー内容

幼少期から現在に至るまでのおおまかなライフヒストリー（台湾本島の出稼ぎ経験や、メディアとの接触など）、工芸品店に関して(1)工芸品店の商品と価格(2)商品の製造過程(3)商品が持つ文化的ディスコース(4)工芸品店を始めた契機(5)その工芸品店の商品を自らも享受しているのかどうか

○非構造化インタビュー内容

(1)蘭嶼という島、伝統文化・禁忌・慣習に対する意識(2)蘭嶼の文化に対する親しみ、知識

○参与観察

工芸品店の形状、場所、時間、経営者の服装、他住民との関わり合い、観光客に対する客引き文句な

ど

0-1-3. 研究の先行研究

蘭嶼島、もしくはヤミ族に関する近年の研究は、蘭嶼島の生態系に関するものや特殊な住居環境、もしくは儀礼・祭祀などのプリミティブな生活様式に注目したものが主であり、観光に関する記述は少ない。しかしその中でも、曾山（1999）によって書かれた蘭嶼観光に関する先行研究として取り上げる。なお、理論研究としての先行研究はFerguson（2000）の近代化と主体性についての文献を取り上げる。

・曾山毅（1999）「蘭嶼ヤミ族と観光-その背景としての中華民国と蘭嶼の政治的な関係-」

本論文は中華民国と蘭嶼の政治的な関係に注目しながら、台湾・蘭嶼に観光という現象が生じた経緯と、住民であるヤミ族にそれが何をもたらしたかを整理したものだ。蘭嶼観光は「未開」の要素を残した風変わりな生活文化を見物することが主要な目的であり、そのような生活を見物にくる漢人観光客の行為は、のちにヤミ族にとって不愉快な記憶として語られることを明らかにした。その上で、ヤミ族が観光と観光客に対していただく反感は、中華民国・漢人と蘭嶼・ヤミ族の権力関係をかれらが了解することによって得られた認識であると述べた。また同時に、ヤミ族のなかには観光を現代漢文化とともにその下位システムとして受け入れ、観光に取り組んできた者も示している。

曾山が展開する議論の焦点は中華民国と蘭嶼の政治的な関係にあるにしろ、本論文は「巨大な力と押しつけられた観光文化」という枠組みで当時の蘭嶼における観光が語られていると感じる。抑圧的な構造から分析するのではなく、蘭嶼の地域社会・文化のコンテキスト、また担い手個人の生活や意識から、近年の蘭嶼における観光とそれを取り巻く地域社会・文化の現状を考察したい。

・Harvie Ferguson（2000）『Modernity and Subjectivity: Body, Soul, Spirit』

この文献は近代化についての新しい見解を提案するものである。近代化はルネッサンスや産業革命などに代表される原始的・前近代的な社会との重要な断絶に関連しているものの、近代化が都度なにを代替したかでは近代化を定義できないと指摘する。そこでFergusonは、近代化は主体性の探求によって明確な定義を獲得すると言う。

近代化した世界では、経験が最も強力な権威である。近代化全体の発展は、人間の自主性（self-autonomy）の原理を解き明かし続けることで理解し得る。この原理を解き明かし続けることは、人間の世界や他者、そして彼ら自身に対する見当識の過激な変容を要する。主体性は身体・魂・生気に現われ、客観-主観のような一つの現実的な表現によって区別されるものではない。この身体・魂・生氣によって、人間は自分のセルフイメージを築き上げるのだという。近代化は特定の完成した人間の生活様式ではなく、継続的なプロジェクトである。そのプロジェクトを主体性の変容という観点から前近代的な社会と文化から区別するのと同じように、近代化それ自体もダイナミックな構造の中で特有の発展を経験するのである。

Fergusonは主体性の変容のプロセスが、近代化の構造を示すと述べている。今回の研究テーマである出稼ぎヤミ族の主体性の変容のプロセスも、彼らが自分自身についての見解を深めざるを得ないことから始まる。漢文化とヤミ文化を比較し、対比によって生まれた「ヤミ族」という

肩書きによって彼らはセルフイメージを築き上げ、それが主体性の変容に繋がっていくのである。そして、Fergusonによれば、その主体性の変容に近代化の構造と発展を見出すことができるのである。

0-1-4. 論文の構成

本論は序章と1章～3章で構成されている。先述するが、序章と1章は参考文献と統計データを用い、2章と3章はインタビューとフィールドワークをベースとして整理、記述する。

まず、序章で研究概要と蘭嶼島、ヤミ族に関する概要を整理する。1章では、蘭嶼ヤミ族がどのような外部接触と社会秩序の変容を経験したのか、その中でも1節では外から島に来た人・ものを統治時代別に整理し、2節では逆に島から外に出たヤミ族が経験した外部接触をまとめる。2章では1章2節で取り上げた島から外に出たヤミ族（出稼ぎヤミ族）が主体性を変容する過程を、インタビューを元にした彼らのライフヒストリーから探る。3章では、出稼ぎヤミ族が担う伝統文化と、彼らにとっての伝統とは何なのかをインタビューと参与観察から考察する。

0-2. 蘭嶼島の概要

蘭嶼島は台湾本島の台南から東南80kmに浮かぶ孤島である。太平洋戦争後、島に胡蝶蘭など数種の蘭が自生し、それが有名であったことから蘭嶼島という名がつけられた。それ以前は紅頭嶼と呼ばれていた。蘭嶼に古くから暮らしていたヤミ族は蘭嶼島をPongso no tao（人の島）と呼び、西洋ではボテル（Botel）島として知られていたが、現在はOrchid Islandとして知られている。

島の中心部分には非常に勾配が急な山々がそびえ立ち、その山々を中心とした島の海岸線の平地に、合計6つの部落（野銀部落Ivalino、東清部落Iranmeylek、郎島部落Iraraley、紅頭部落Imarod、漁人部落Iratay、椰油部落Yayo）がそれぞれ島を囲うように位置している。現在人口は5000人程だとされており、主にヤミ族（タオ族）と呼ばれる原住民と台湾人が共存している。古くからこの島に住むヤミ族は自給自足の暮らしでよく知られており、タロイモ、サツマイモなどの栽培、その他はトビウオなどの漁獲を中心とした食文化が形成されている。ヤミ族の文化の大きな特徴は自然崇拝であり、その崇拝に関しては非常に多くの禁忌や儀式が存在する。蘭嶼にはその地理的な特徴から、経済的発展も遅く、異文化の混入がきわめて少ないため、しばしば学者からの注目を集めてきた。しかしそんな蘭嶼島は、1877年の清朝政府、日本統治、現在の中華民国統治を通して、ヤミ族は新しい社会秩序に巻き込まれ、徐々に彼らの暮らし、価値を変化させてきた。

本章では、蘭嶼島の環境、蘭嶼島での暮らし、ヤミ族という民族、を3つの節に分け、主に臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》の第3章を参照しながら整理する。

0-2-1. 蘭嶼島の環境

本節では蘭嶼島の環境を、地理環境、自然環境、気候に分けて整理する。

○地理環境

蘭嶼島の地理的位置は台湾本島の東南方であり、東経121°30'08"~121°36'22"、北緯 22°00'06"~22°05'07"、満潮時の面積約 45.74 km²、干潮時は約47.54 km²、島の周囲は38.45 km、台湾

の離島の中で、澎湖本島に次ぐ二番目の大きさである。その他に本島の東南3海里には小蘭嶼と呼ばれる小島が存在し、面積は約1.6km²、周囲は全長4.3km、海岸は崖が多く、陸上には水源地や農耕地がないため、現在は無人島である。¹

蘭嶼は古い火山島で第三紀の凝灰岩・輝石安山岩・石灰岩からなっている。平坦地はわずかに海岸線付近の、きわめて狭小な面積のみである。島のほぼ中央部にある芳蘭峰(548m)、東南部にある望南峰(480m)を骨格とし、ほとんどは勾配の急な斜面となっている。²

○自然環境

蘭嶼島はいくつかの代表的な固有種を持つ。爬虫類は分かっているだけで19種存在し、内ヘビ類が8種、トカゲ類が11種である。守宮(*Gekko kikuchii*)と雅美鱗趾蝟虎(*Lepidodactylus yami*)は蘭嶼の固有種である。昆虫類は10目78科341種存在し、蝶類は116種、そのうち珠光鳳蝶(*Troides magellanus*)は蘭嶼固有種である。この蝶は度々部落周辺のタブー区域に飛行し、蜜を探したり特定の植物を探して産卵したりするため、ヤミ族に「Papano anito」(悪霊の蝶)と呼ばれている。鳥類に関して言えば、蘭嶼は鳥類が東南アジア移動の中継所であり、多くの種類の鳥類を観察することができる。統計によれば約110種類が存在し、(黄鈺純等, 2008)、中でも蘭嶼の固有種である「蘭嶼コノハズク」(*Otus elegans botelensis*)は台湾特有の亜種であり、1981年にIUCNでレッドリストに絶滅危惧IA類として挙げられている。³また、珠光鳳蝶(*Troides magellanus*、コウトウキシタアゲハ)などの一部の絶滅危惧種は、蘭嶼郷生態文化保育協会が保護育成に当たっているという。⁴

○気候

蘭嶼島は亜熱帯地区に位置し、高温多湿な海洋気候である。Thornsweet氏の分類法によれば亜熱帯重湿型に属し、その特徴は気温は高く、雨水豊富である。毎年9月から翌年4月まではモンスーンの季節であり、5月から8月は西南からの季節風が吹く。10分平均風速は約26.17m/sに達し、最大瞬間風速は37.85m/sである。年間平均湿度は88%以上で、月の平均温度は約23°C月最高気温は約28°Cである。月の最低気温は約17.8°Cであり、その温度差は10°C以上に達する。平均年間降水日は約206日であり、降雨量は多く、毎月月の半分以上の日数が雨である。年間平均雨量は3000cmに上り、乾季はない。蘭嶼は東南アジアの海洋低気圧と東北アジア大陸気流の交わる点にあり、毎年7月から11月は台風季節で暴風雨の被害を受ける。⁵

0-2-2. 蘭嶼島での暮らし

本節では、蘭嶼島での暮らしを、人口、集住地、産業、公共施設に分けて整理する。

○人口

台東縣蘭嶼郷統計年報に登録されている2016年10月時点での人口数は5083人である。そのうち、男性が2571人、女性が2512人である。しかしこの人口が意味しているのは、蘭嶼島に戸籍を持つ人の数であり、台湾本島への出稼ぎや婚出などを考慮すると、実際に蘭嶼に住む人口を捕捉することは困難である。また、農業従事人口は1433で、総人口の28.19%、漁業従事人口は1083人で、総人口の21.31%である。⁶

○集住地

蘭嶼島には6つの部落(野銀部落Ivalino、東清部落Iranmeylek、朗島部落Iraraley、紅頭部落Imarod、漁人部落Iratay、椰油部落Yayo)が存在する。これらの部落はそれぞれ海岸近くの平坦な地に位置している。また、台湾の台東縣は蘭嶼を4つの村(椰油村、漁人部落含む紅頭村、

野銀部落含む東清村、朗島村)に分けて管轄している。2つの部落を1区画とまとめているが、各部落は伝統祭事あるいは帰属意識においては部落ごとに主体性が維持されている。各部落には漁業用の港が存在する。以下の図は各部落の位置を表す。



○産業

蘭嶼島を代表する産業は、農業、漁業、畜産業である。

・農業

台東縣蘭嶼鄉統計年報によれば、2016年の蘭嶼の農地面積は760.28ha、そのうち水田面積は173.23ha (22.78%)、残り587.05ha (77.21%)は陸田である。農家の戸数は434戸で、農業人口は1433人である。開墾は男性の仕事であるが、日常の草むしり、栽培、収穫などは女性が負担していた。主な作物は水芋、山芋、長芋、さつまいも、粟などである。水田に植えるタロイモと陸田に植えるサツマイモが主な主食で、里芋、長芋などは主食の芋の不足を補う役割がある。⁷ヤミ族は伝統的にイネを栽培してこなかった。アワは、儀礼上重要な作物とされることもあり、収穫祭ミバチはよく知られている。⁸

・漁業

台東縣蘭嶼鄉統計年報によれば、2016年の漁業の戸数は263戸で、漁業人口は、1083人である。蘭嶼島は周りを海に囲まれているため、漁業が自給自足生活の主軸と見なされていた。それぞれの部落には特定の漁場及び公共漁場があり、トビウオ、シイラ、マグロなどが主な漁獲物である。漁業技術や漁船などの伝統的な道具は非常に発達し、生活上欠かすことのできないものとなった。同時に、ヤミ族の伝統的な生活方式の一つとしても知られており、魚をとる技術の良し悪しが男性の社会的地位の高低を決めたと言われている。近年は機動船の導入により、夜間の伝統船による集団漁業はほとんどなくなり、網を用いた漁業が行われている。⁹

・畜産業

蘭嶼島には、ブタ、ヤギ、ニワトリなどが牧畜されている。ヤギは放牧され、ブタとニワトリは集落の中または周辺部で飼育されている。¹⁰牧畜と採集はヤミ族の補助的な産業であり、伝統的な家畜の世話の責任の分け方は、性別に依存していた。女性は豚を、男性は羊を担当した。家畜は放牧によって育てられ、自然に放牧されているヤギの群れや、豚の群れは蘭嶼の特徴的な景観となっている。

0-2-3. 蘭嶼ヤミ族

ヤミ族は蘭嶼に古くから住み着いていたとされる民族である。ヤミ (Yami) という名称は、1897年に鳥居龍蔵が蘭嶼にて初めて学術的な調査を行った際に付けられた。ヤミ族はオーストロネシア語族に属し、フィリピン北部のバタン諸島から少なくとも600年前には蘭嶼に居住していたと思われる。ヤミ語を話し、文字を持たず、男性は季節関係なく半裸にふんどしを着用し、半地下式の伝統家屋で暮らしていた。様々な儀式や禁忌が存在し、しばしば原始的でサステイナブルな生活を送っていると思われてきた。この説では彼らの食文化、衣服と住居、霊性文化、大船文化、慣習と精神風土に焦点を当て、解説する。

○食文化

ヤミ族の食文化は農業、漁業を中心に形成されている。主食はタロイモとサツマイモ、トビウオであり、時には貴重なタンパク源としてブタ・ヤギ・ニワトリが飼育されている。ヤミ族は魚に関する文化や分類に関して複雑な体系を持ち、性、年齢、出産の前後などによって、その魚が食用可能かを判断する。¹¹ またヤミ族はトビウオが神が天からくれた賜物と考えており、それ故飛魚の捕獲、屠殺、天日干し、調理全てにおいて守るべき儀式が存在する。¹²

ヤミ族の特徴的な食文化のひとつとして、酒・タバコを嗜まないことが挙げられる。しかし酒類に関しては、台湾の中央研究院民族学研究所の元所長劉斌雄によれば、酒を作る技術を持っていた可能性を示し、酒を作らなくなったのは争いを忌避するためにとったヤミ族の適応の戦略であったと考えているという。¹³

○衣服と住居

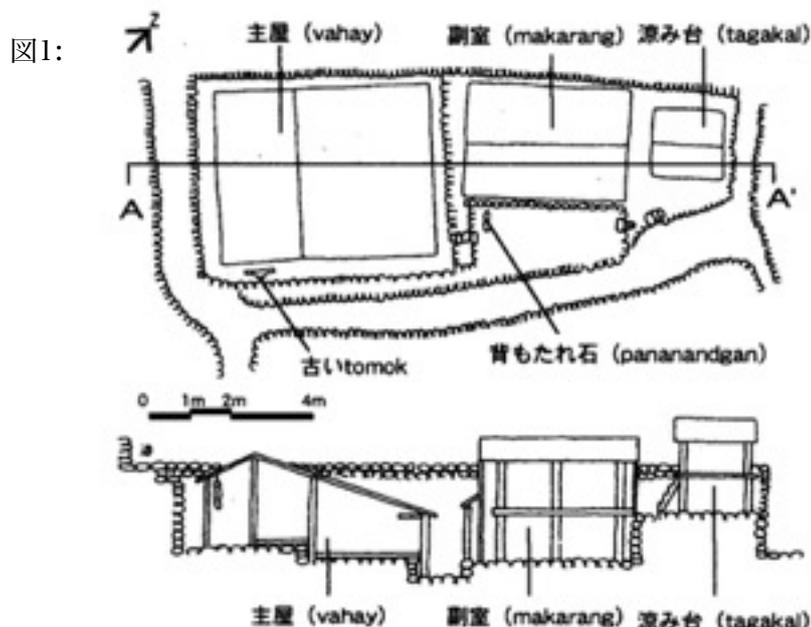
伝統的な民族服は、男性が袖なしの上着と禪、女性は袈裟衣と腰巻があることが知られている。これらの民族服は、ヤミ族の女性たちが自紡の麻糸や木綿糸でジスアクの腰帯機を使って、独自の技術と方法を用いて織った布で製作している。¹⁴

ヤミ族の部落(集落)空間・居住空間には、彼らの価値や慣習がよく表れている。鄭・古谷(2004)は、伝統家屋についての空間的な分析と、集住体に関してヤミ族は限られた場所に密度の高い集住体を形成しており、理想的立地条件からみると、少ない水源を求めてそれを背負う形で部落を形成しているという。また、部落は同居集団の屋敷・共有通路等で構成され、部落の中心となる広場や集会施設をもたないのも、ヤミ族の部落空間の特徴である。

ヤミ族の居住空間は、半地下式の伝統家屋に代表される。伝統家屋は、はっきりした扉や柵を持たずに傾斜面を掘下げて地下を作り用途によって分棟型になっていて各自違う床レベルになっており、住居形式は主屋(Vahay)、副屋(Makarang)、涼台(Tagakal)が基本単位である。

(図1参照。)主屋は、傾斜地を掘下げて建設されており、ヤミ族が主に食事をする場所である。調理用の炉と、飛魚の薫製作りのための竈が設置され、竈の上には排煙口が設けられているが、それ以外の窓はないため通風が悪く、家の中は蒸し暑い。この閉鎖性は、貴重な食料を保存するための燻製を作るために必要な条件となっている。大きな主屋は、集団漁の時に結成される船組の待機所としての機能も有し、規模の大きな主屋をもつことは、集団漁のリーダーとなるための重要な条件であったという。副屋は、主屋の前廊と同じか、それよりもわずかに高い位置に建てられた高床の建物であり、夏期や薫製作りの時期には、副屋は日常生活の場となる。また、老親の居室や、もしくは新婚の子供夫婦が自分の主屋を建てるまでの生活の場として使用されることもあり、重要な機能を果たしているという。涼台は、副屋の床面と同じ階層に建てられており、床の高さは歩行面から約1mで、木梯子を用いて登り降りをする。風通しがよく夏の間は寝床を兼ねた日常生活の場となる。道に接して敷地の端に建てられ、通行人からも涼台の住人からもお

互い声をかけやすく人々のコミュニケーションの場を提供しているという。図1は主屋 (Vahay)、副屋 (Makarang)、涼台 (Tagakal) の位置と構造を表す。¹⁵



○霊性文化

・アニトの存在

ヤミ族を語る上で欠かせないのが、悪霊アニトの存在である。アニトに関する記述は様々である。しかしアニトは人の亡骸に宿るとされており、ヤミ族がしばしば亡骸の処理に特別なやり方を要していたのは有名である。稲葉・瀬川 (1931) も、『紅頭嶼』に、「人死すればアニトと言ふ蒸しものとなりそれは人類に様々の災を齎すものであると云ふ信念を持つてゐる彼等は死骸に一種の恐怖を持ち生前如何に親密の間柄であつた者でも肉身の極めて近い男以外には決して寄り附かない」というしていた。また人類学者の鳥居龍蔵は蘭嶼島での調査中に、彼の助手であった中島藤太郎が大やけどを負って死亡した際、ひとりで丘の上に穴を掘り、亡骸を埋めたという。¹⁶

このアニトの存在は、しばしば蘭嶼社会にとって、悪行を制約する働きを持っていたと言われている。森口 (2005) はアニトについて、「ヤミの人たちは、どうも何か周りを気にして、監視者がいるような感覚で、毎日の生活をし、日々の言動、行動を規制し、人生を送っているように思えて仕方がない。誰かが周りにいて、ヤミの人たちの会話を聞いていて、それを聞きつけて良いことだと何か悪いことされるのではないかと、自分の生活を規制している様であった。」と述べている。

・儀礼・祭祀

ヤミ族はトビウオ漁を中心として1年を3つの季節 (トビウオ季-春季2-6月-、トビウオ漁終了季-夏季7-9月-、トビウオ漁が迫る時季-冬季11-1月-) に分類し、それぞれ異なる季節に異なる漁猟生活を有し、各種の儀式や祭祀が存在する。また、年中行事や暦をも海洋をコアとした文化系統を発展させた。年間にそれぞれ祭典と節気に合った作業スケジュールが存在し、ヤミ族は年中行事スケジュールに従って各項目の労働をし、生活リズムを自然の韻律に合わせ、混乱せず、且つ永続的な知恵を得たという。¹⁷

また、ヤミ族の儀礼・祭祀ヤミ族は装飾品を身につける。一つ一つが悪例を祓い、幸運を招く霊力を持った呪具である伝統的なアニミズムの文化と世界観を維持し発展させてきたヤミ族にとつ

て、そうした装身具だけでなく、身につける衣類も全て信仰の対象であり、はじめて身につけるときは祭祀や祈願を必要とするものであった。ヤミ族の歌の掛け合いは儀式の中で行われ、重要な要素となっている。¹⁸

○大船文化

蘭嶼島の民宿や部落周辺でよく目にする色やシンボルがある。これらシンボルは図2のような、赤、黒、白で彩られた幾何学模様である。これらのシンボルが最もよく表されているのは、彼らが作り、保有するゴンドラ型の船である。ヤミ族は機動船が持ち込まれるまで、漁獲に伝統的な船を使用していた。1-3人乗りのものを「タタラ」と呼び、6-10人乗りのものを「チヌリクラン」と呼ぶ。造船および所有も父系親族で結成される船組単位でなされる。¹⁹この船は儀式の際にも使用され、ある一定の期間、女性や妊婦は触ることを許されない。船は大小関わらず材料集めから完成まで約3ヶ月を要し、寿命は10年ほどである。船が一人で作れるということは、畑や漁撈などの仕事も一人前にできるということの意味し、成人の男性になった証明と考えられ、結婚できる条件であったという。²⁰

○慣習と精神風土

・家族形態

ヤミ(タオ)族は父系制に属し、父母と未婚の子女が共同生活を行う。婚姻は観念上一夫一妻制度であり、男女は恋愛後、女性が男性の家に移り住み、適応し安定した関係となる。結婚の相手については過去は部落内の通婚が主であったが、現在は部落間の通婚が増加した他、他の原住民族や漢民族との通婚比率の増加も少なくない。²¹

・平等指向

ヤミ族の精神観の非常に大きな特徴として、リーダー(頭目)が存在せず、平等が徹底されていることがあげられる。片倉(2004)は、ヤミ族の財産は自然の神の下、基本的に共有であること、また集落内の議論を長老たちの合議で解決していたことを明らかにした。²²それだけではなく、乾(2003)はヤミ族には階級ばかりでなく、個人差を生み出すことになる専門職もほとんど見られないと述べた。家や船などの生活材は自分で作り、儀式や祀りでは基本的に歌を歌い、楽器は使わないため、上手い下手があっても誰でも参加できるのだという。²³この平等思考に関して外山(1979)は、ヤミ族には種族の大々的な移動や、種族間の戦闘がなかったため、それに必要な強固な団結と政治的な指導者が重要視されなかったことから、ヤミの温厚な性格と共存が実現されたと解釈している。²⁴

・競争と富の強調

そんな平等指向のなかで、ヤミ族は同じ世代同士が競争し、他よりも抜きん出るべく努力をするのだという。良い船に乗るのも、より立派な家に住むのも、より多くの魚をとるのも、すべて個人の能力次第であるから、それをお互い競い合うのである。こうした競争のなかでもっとも重視されるのが、大判振舞を伴うミヴァライ儀礼である。彫刻船などの完成時にこなわれるこの儀礼では、水田で栽培された大量のタロイモ、ブタ、ヤギなどの準備に数年を必要とし、この主催者の人生における晴れ舞台なのである。これを繰り返すことをヤミ族は誇りとしてきた²⁵

0-2-4. まとめ

食文化や家屋や船などの生活用品、アニトに代表される宗教観や平等志向など、ヤミ族の様々な側面が学者の関心の的となってきた。長く孤立が続いてきたと考えられている島で、独自の秩序

や慣習、価値や暮らしを発展させた蘭嶼島ヤミ族であるが、近年では、ヤミ族の文化変容や台湾本島との政治的な関係性などが注目を集めるようになった。戦後から急速な変化の波は、蘭嶼島の景観だけではなく、ヤミ族の独自の慣習や暮らし、嗜好に渡るまで、様々な変容をもたらした。本論では、ヤミ族工芸品販売者に焦点を当て、彼らに訪れた変化を、蘭嶼の近代化と彼らの主体性、ヤミ族の伝統工芸品をテーマとして整理し、考察する。

第1章 ヤミ族外部接触の歴史

ヤミ族と外部の接触の歴史は、記録に残っているだけでも数百年前に遡る。海洋交易から始まり、清朝、日本、中華民国からの統治を経験した。この歴史の過程から、蘭嶼ヤミ族は交易による物々交換、統治国家による教育や兵役、管理体制などを経験し、近年では衣服、食文化、住居空間、嗜好に至るまで変容した。中華民国政府との対立という政治的な側面や、貨幣経済に伴う産業の多様化や消費社会の拡大という経済的な側面でも発展を見せた。現在は観光客などの来訪者がいるだけでなく、出稼ぎなどで台湾本島で暮らすヤミ族も多い。本章ではヤミ族と蘭嶼島来訪者との接触と、ヤミ族が台湾本島で経験した外部接触に分けて、蘭嶼変容の実態とヤミ族の反応、また外部接触が築いたヤミ族と外部者の関係性を明らかにする。

1-1. 島に訪れる様々な来訪者とヤミ族の関わり

本節では、蘭嶼島の外部接触の中でも、島に訪れる人・ものを整理する。

1-1-1. 来訪者たちと彼らが残したもの

蘭嶼島は来訪者たちとの外部接触を通じ、様々な変化を経験した。本論では、統治国家別（清朝統治時代、日本統治時代、中華民国統治時代）に、ヤミ族が経験した外部接触と、蘭嶼島及びヤミ族に訪れた変化を整理、考察する。

1-1-2. 統治国家別の整理（清朝統治時代、日本統治時代、中華民国統治時代）

1-1-2-1. 清朝統治時代前（不明～1877）

蘭嶼島（当時の紅頭嶼）がいつ発見されたかは不明である。しかし、清朝統治時代前に蘭嶼島が発見されなかったわけではない。それ以前にも、記録は少ないながらも交易などを通して外部との接触が発生していたという。残っている記録の中でも、陳（1969）は、1722年に清朝から清朝政府官僚の黄叔敬が蘭嶼島を視察し、また1726年にオランダ人Francois Valenlynが、1785年にフランス人La Peruzが蘭嶼島と接触を持ったことを、蘭嶼島の発生事項のひとつとしてまとめている。また、ヤミ族は、自らバシー海峡を航海して交易を行う海洋民だったという。先祖のバタン諸島とは長期にわたり贈与交易を行い、蘭嶼の豚と、金・銀・中国製陶器・鉄などを交換したという。しかしバタン諸島との交易は1783年にスペインが同島を占領してから途絶えてしまった。

また、スペインとの交易を推測する学者もいる。中生（2012）は、2011年9月に台湾博物館の蘭嶼島収蔵庫で、スペイン騎士スタイルの牛皮製鎧を発見したという。これは、スペインが台湾と交易をしていた時代に、スペイン船が蘭嶼島沖を航行して交易を行っていた証拠であると示した。また、ヤミ族の儀式でよく目にする彼らの銀の帽子も、銀の生産地から遠い蘭嶼島で銀を手に入れた理由として、スペイン銀貨を加工したものであると説明した。²⁶また米澤（2010）も、蘭嶼島がフィリピン-中国、フィリピン-日本を結ぶ交易路上に位置していることで、この交易ルートを保有するスペインが蘭嶼で水・食料を補給したのではないかと推測している。蘭嶼の湾は水深が深く、天然の良港であり、大型船も陸近くによって停泊することが可能であること、水が豊富であること、また、ヤミ族が好戦的な民族でないことから、蘭嶼島を経由したのではないかと述べている。²⁷これらの記述から、スペイン船のような外国船とヤミ族は友好的な関係を

築いていたと思われる。ヤミ族は彼らに水や食料などを提供し、その代わりに銀貨を受け取っていたのではないだろうか。米澤（2010）も記述しているように、ヤミは好戦的な民族ではない。外界から来るものに対しても、敵対することなく対応していたと考えられる。

1800年代前半には、台湾商人が来島し、蘭嶼の豚と、銀・鉄などを交換した。²⁸乾（2003）は、島外からもたらされたもの、特に金属は、農具や装身品に使われ、その影響は大きかったと推測している。²⁹

自然と文化確認当時のヤミ族は、海洋交易を行っていたことから、島の外の存在を認知し、交渉などに慣れ親しんでいたのかもしれない。しかしこの交易を行っていたのは男性であり、島に残された女性や子供などのヤミ族は、外の存在に対してどのような印象を持っていたのかは定かではない。

1-1-2-2. 清朝統治時代（1877～1895）

1877年に、周有基など20名が清朝政府から派遣され、蘭嶼島を調査、海上防衛の重要性から、蘭嶼は清朝の領土となった。³⁰1877年に清朝の領土に含まれたことは、一般的認識として一致しているが、清朝統治時代のヤミ族と清朝政府の接触や関係性に関する記述はあまり確認できない。しかし三富（2003）によると、清国政府が蘭嶼に使節と贈り物を送り、行政上はその下に置かれたが、全く干渉はされなかったという。³¹

朝政府からどのような人々が派遣され、どのような接触があったかの詳細は明らかにされていないが、台湾商人が蘭嶼に訪れ始め、鉄製農具の入手が比較的容易となり、農作業や生産量が向上したという。³²曾山（1999）は、彼らとの接触はヤミ文化の形成に対してそれほど影響は残していないと指摘している。

1-1-2-3. 日本統治時代（1895～1945）

日清下関講和条約によって、台湾および台湾の近隣諸島が日本の領土となり、蘭嶼島も1895年から日本の統治下に置かれることとなった。日本統治時代蘭嶼島は、日本が台湾総督府を通じ、外来者の立ち入りを禁じていたことから、外部接触は積極的に行われなかった。また、台湾総督府はヤミ文化の保持を統治方針としたため、経済開発も行われなかったという。³³しかし、全く変化が起こらなかったわけではない。島には数々の人類学者が訪れ、蘭嶼島に関する研究を進めていた。また、小規模な教育や交易も行われていたという。

研究者、管理体制、教育、交易に分けて、蘭嶼島に訪れた変化を整理する。

○研究者

台湾総督府は、蘭嶼島を「研究区」として設定し、外来者の立ち入りを厳しく規制した。数々の日本の研究者は蘭嶼島（当時の紅頭嶼）を訪れ、記録を残している。

蘭嶼島を訪れた人類学者に関しては上田滋（2003）が「日本人のヤミ族文化研究」で詳細に記している。人類学者にはじめに蘭嶼を訪れたのは、鳥居龍蔵（1870～1953）である。鳥居は、ヤミ（Yami）という名称を付けたことでよく知られている。1896年から1900年に渡り4回の調査をした鳥居であったが、その頃のヤミ族には日本語も中国語も通じず、2ヶ月間ひたすら観察をしていたのだという。その鳥居に感化された浅井恵倫（1895～1969）は、言語学者としてはじめてヤミ語の構造を明らかにすることに成功した。他にも、鹿野忠雄（1906～1945）、国分直一（1908～2005）、馬淵東一（1909～1988）などがフィールドワークを行った。千々岩助太郎（1897～1991）は戦後も何度も蘭嶼島を訪れ、伝統家屋の記録を残した。千々岩が32年ぶ

りにヤミ族との1人と再会エピソードからは、彼らの親交の深さがうかがえる。³⁴また、稲葉・瀬川（1931）は、当時蕃童（ヤミ族の児童）が書いた作文と手紙を載せている。子供から稲葉・瀬川らに、東京に帰ったら写真を送ってくれると言ったから待っている、というような内容だった。³⁵子供にとって彼らは、駐在官よりは親しみやすかったのではないかと考えられる。

○管理体制

日本の蘭嶼統治は、ある時期まではほとんど実践されることはなかった。³⁶しかし1903年に起きたある事件をきっかけに、台湾総督府は蘭嶼島ヤミ族に対する管理体制を強めることとなる。この事件は、「ベンジャミン・セオール号事件」として知られており、事実に対する認識の差から、当事者双方の異なった記述が残されている。足立（2007）は、「日本統治時代初期台湾のベンジャミン・セオール号事件に関する研究」において本事件をまとめている。本事件は、シンガポールを出航し上海に向けて航行していた米国船ベンジャミン・セオール号が台湾南沖合いにて台風に遭い、二艘のボートに分かれたうちの一艘が、蘭嶼島付近を漂流した。しかしこのとき船で近づいてきたヤミ族によって衣服を奪われ、内4名は溺死、3名は行方不明、5名は沖まで泳ぎ助かったという。その後、米国の申請により日本はヤミの加害者10名を逮捕、彼らの家屋13戸を焼き払うなど、懲罰行動に踏み切らなければならなかった。そして、これ以降2度と漂流者にこのようなことが起きぬよう、日本は「警察派出所」設置や学校教育の提言が行われた。³⁷

一方ヤミ族側の見解はこれとは異なり、ボートが蘭嶼島に漂流した際ヤミ族は、帽子をかぶり鉞をもって海辺に迎えに行ったが、アメリカ人が襲われると勘違いし発砲したとしている。³⁸確かに、今まで日常的に争いを避ける精神風土であったヤミ族が、急に積極的に人々を攻撃するとは考えにくい。この事件と日本政府の対応は一部のヤミ族に対して動揺を与えたに違いない。

○教育

「ベンジャミン・セオール号事件」以降、事件同年1903年に「警察派出所」が設置され、その後1923年に紅頭村に「蕃童教育所」（1927年に「紅頭嶼教育所」と改められた）が設置された。これを機に、島民への日本語教育が開始した。教育所は午前中教育のみで、当時から駐在官の一人が休日を除いて毎日教鞭をとっていたという。科目は台湾総督府発行の蕃童用教科書を用いた内地（日本）語会話の話し方、読み方、算術、書方、図画、唱歌、農業実習、作文の八教科があったという。³⁹中生（1994）は、ヤミ族へのインタビューで、当時の状況を明らかにした。教育所は紅頭村だけにあったため、漁人、野銀、椰油村の子供は歩いて通学し、郎島村は遠いので、紅頭に子供を下宿させていたという。教育所は4年制で、生徒は1学年に50人ほどおり、どの部落出身でも同じ教育所に通っていたので、蘭嶼島で同世代の人は大体顔見知りだという。⁴⁰この教育所に通っていたヤミ族には、今でも日本語を話せる者がいる。

児童向けの小規模な教育所であるものの、島の子供たちを一箇所に集め、一定の時間同じ空間を共有した事例としては、初めてのことだったと推測される。また、経済単位が家族であったヤミ族にとって、家族、もしくは親族、部落共同体以外の他者から、何かを集団で習うこともこれが最初だろう。稲葉・瀬川（1931）は、駐在官が教育が如何なるものかを解さない父兄に対しその子弟の就学勧誘をするのに苦勞をしたと記録を残している。登校者に対して学用品、菓子、砂糖などを支給し、またある時は米飯をたいて振舞ったと記録を残している。懐柔主義をとったと記載してあるので、そこまで手厳しいやり方で教育を押し付けようとはしていなかったのではないか。さほど親密な関係でもないが、敵対もしていなかったように思える。

○交易

1918年に野性軟化、生活の保護、社会生活の向上などの目的から「蕃地交易所」が設置され、蕃産品（蘭嶼の物）と蕃人需要品の交換が行われたという。貨幣の価値を知るようにはなったものの、物々交換の域を脱しないものであったと言われている。日本から鉄製農具やマッチ、木綿

布などが導入され、それに伴って、発火法が用いられなくなり、男女共に新型の衣服を考案し広く用いられるようになった。⁴¹

当時はまだ日本から蘭嶼島に行くための定期便があるわけではなかったという。⁴²頻繁に交易が行なわれていなかったとしても、ヤミ族の生活に多少の変化を与えたことは明らかだろう。

1-1-2-4. 中華民国統治時代（1945年～現在）

多くの記述に残されているように、蘭嶼島の急激な変化は、戦後の中華民国（台湾）統治時代に起こった。蘭嶼島の景観から、ヤミ族の暮らし、価値、伝統などが現在でも変化しつつある。1945年以降、近代化された管理システムが施行され、キリスト教の布教が開始し、観光地として解放されるとともに様々な公共施設が設置された。現在は近代的な家屋と民宿、港には機動船があり、24時間営業をしているコンビニエンスストア（セブンイレブン）まで存在する。曾山（1999）は、中華民国政府はヤミ文化を非近代的で改善を要すると認識し近代漢文化の導入を図り、一種の同化政策を行ったと示している。

自治制度設置、居住空間の変容、蘭嶼キリスト教、教育と兵役、公共施設、核廃棄物貯蔵所問題、観光開発、消費社会の拡大に分けて、中華民国統治時代の蘭嶼島に何が起り、外部との出来事が彼らの関係性にどのように影響を残したのかに焦点を当て、蘭嶼島ヤミ族と外部接触の歴史と、ヤミ族が経験した変容を整理する。

○自治制度設置

1946年5月、郷公所が設置され、自治制度が施行された。島の主軸を中心にして、北東側の郎島部落、東清部落、野銀部落各社を東清村に、南西側の紅頭部落、漁人部落、椰油部落各社を紅頭村に編成された。また、郷長、村長、郷民代表、県議員が選ばれた。公務員には月俸として現金と主食が支給され、施行当時の郷長の月俸は1160元だったそうだ。⁴³この郷公所はヤミ族の生活を改善するための施策を掲げたが、実施規模と影響力にははっきりしない点が多いという。⁴⁴しかし、今まで頭目の存在を持たないヤミ族にとって、郷長の存在は新鮮だったにちがいない。この自治制度は現在でも続いており、当時よりも更に組織化された体制が置かれている。⁴⁵

○居住空間の変容

序章でも述べたように、ヤミ族の特徴の一つに、半地下式の伝統家屋がある。ヤミは自ら伝統家屋を建て、暮らしてきた。しかし現在、ほとんどのヤミ族はこの伝統家屋ではなく、鉄筋コンクリートで作られた家に住んでいる。

鄭・古谷（2004）はヤミ族の住居環境の変化に関して、「台湾蘭嶼島ヤミ族住居の近代化における住居空間の変容について」で住居空間の形態と空間性質の変容を明らかにしている。この変化の背景には、1966年から1987年まで中華民国政府がヤミ族の漁業と農業の強化および衣食住の改善を目的として実施した「改善蘭嶼山胞生活四年計画」が影響している。この計画によって、政府は1966年から1980年にかけて国民住宅という鉄筋コンクリート製の平屋556戸を蘭嶼島に建設、無償でヤミ族に提供した。しかしこの国民住宅は、工期が短かったこと、また建設費を削減するために海砂を使ったため欠陥が生じてしまったことから、大半の住民が増改築を行っているという。また、当時はヤミ族にまだ近代的な生活が浸透していなかったために、この均質な国民住宅は受け入れられ難かったことも、国民住宅の増改築につながった。2004年時点で蘭嶼島には、2001年4月までに政府から国民住宅の取り壊しと新築建設の費用として世帯ごと、554戸に45万元が支給された。しかしその後出稼ぎから出戻りしたヤミ族が本島と同じ造りの家屋を建て始めたり、伝統生活の衰退や近代的生活の浸透、近代的な建設技術の流入によって、建てられる新型住宅の空間性は、1度拒否したはずの国民住宅における空間と同質なものとなってしまったという。⁴⁶

「改善蘭嶼山胞生活四年計画」による国民住宅の出現と、それ以降の蘭嶼島全体の近代化の影響により、伝統的な家屋建築の継承が止まっただけでなく、人々が居住空間に対して求めるものも変化し、そのニーズは彼らの生活をより近代的なものへ加速させるかもしれない。

○蘭嶼キリスト教の出現

蘭嶼島にキリスト教布教が訪れたのは、戦後のことである。1948年、キリスト教の長老協会が布教を開始した。

中生（1994）は「台湾蘭嶼島ヤミ族の文化変容」で蘭嶼島のキリスト教に関して詳細に記述している。1954年に長老会が、1961年に天主教がそれぞれ教会を建てた。布教当初から多くのヤミ族の人々はキリスト教を信じていて、天主教や長老会の教会に礼拝に出かけていたという。またクリスチャンになると台湾本島のどこへ行っても、寝る場所と食べる場所がある、だから神様に仕えることが一番だったということをヤミ族へのインタビューで明らかにした。また同時に、ヤミ族が自分達のもともと信じていた神が、実は「本当の神」であるキリスト教であったと理解したのではないかと考察を述べている。⁴⁷

また、徐々にキリスト教信者が牧師を中心にコミュニティを形成していった。後述するように、蘭嶼の核廃棄物問題の反対運動を率先して行ったのも、蘭嶼キリスト教のグループだと言われている。蘭嶼島を拠点に発足した家族や部落共同体以外の初めての協働コミュニティだと言っても過言ではない。

○衣服と嗜好の変化

前述したように、ヤミ族は喫煙の習慣がない。しかし国分（1953）によれば、終戦後の調査ではすでに若い男性から老人まで煙草を求めていたという。これは戦時中に日本兵に与えられ喫煙したことと、戦後に2度寄島したアメリカ船からたくさんの巻煙草を貰い受けたことが煙草への憧れを生んでいると指摘した。⁴⁸また衣服の変化に関しては、1964年の時点で、祭礼の場合を除く服飾に大きな変化があったという。若い女性には耳飾も胸飾も愛用されなくなり、従来のラム製布の短いスカートは、洋式のスカートに取って代わられたという。髪飾さえ用いず、台湾本島に行く機会をもつ女性はパーマントウェーブをかけてくるという。⁴⁹

○教育と兵役

1946年に国民小学校が開かれ、中国語による義務教育が実施された。1969年には蘭嶼中学を設立した。曾山（1999）は、50、60年代に要請された中国語のコミュニケーション能力はやがて70年代以降のヤミ族の行動圏が台湾島に及び、現代漢文化を急速に受容する際に有効に働くことになることを指摘している。しかし1960年代の漢民族教師について、ヤミ族の夏・藍（2011）は、「彼らは新しい知識を持ち出すことで（実のところそれは古い考えの中華文化である）彼らの目に映るタオ民俗を貶し、更に私達を小さい頃から、私達が台湾人に比べて「低等」で「野蛮」であると感じるようにさせた。これらが私自身が漢民族教師に抱く偏見の起源である。」と述べている。当時のヤミ族と教育機関の関係は好ましいものではなかった。⁵⁰現在では、台湾本島の大学に進学する者も多く、教育機関は蘭嶼島の近代化にとって重要なものとなっている。

また台湾では1950年以降、平民は国民の義務となっている。男性は満20歳になると身体障害者を除き、いずれも兵役に服さなければならない。蘭嶼ヤミ族も例外ではない。

○公共施設

蘭嶼島には現在、火力発電所、水道水設備、ごみ埋立地、医療提供期間としての衛星所、派出所が存在する。これらは戦後急速に設備されたものだと考えられる。

まずは台湾と蘭嶼島をつなぐインフラが整っていく。1960年には、台東-蘭嶼島間で電報による通信が開始し、紅頭郵政支局が設立された。同年、郵便物を運ぶための大型船、「郵凱輪」が就航することになる。⁵¹

また1971年の蘭嶼観光の正式解放につき、航路、空路、陸路が拡大され、民間に解放されていく。

航路に関しては、1968年には「開元港」が建設開始し、同年、客船「蘭嶼輪」が就航を開始した。「開元港」は1971年に完工。⁵²現在では凱旋客輪、緑島之星客輪、金星客輪の3社が運行しており、蘭嶼-台東間及び蘭嶼-後壁湖間をそれぞれ1日あたり3便から5便で結んでいる。⁵³

空路に関しては、1969年に蘭嶼空港が民間に解放され、1973年には拡張工事が行われた。1971年には、民間の小型機が、1972年からは、定期便が就航を開始した。⁵⁴現在では蘭嶼-台東間を結ぶ唯一の航空会社である徳安航空が存在し、オンシーズン(2018-2019年度)は1日あたり6往復から8往復の便がある。⁵⁵唯一の航空会社である徳安航空が運用する小型機は12人乗りで確保が困難であり、強風などによる欠航も頻繁であるため、観光客の殆どが航路を利用する。

陸路に関しては、1973年に環状道路が開通され、1983年にはコンクリート工事が完工した。また、2台のバスが走行を開始した。⁵⁶この環状道路の建設は、部落間を平坦な道のりですぐすぐを可能にし、島外からの来訪者も自動車や原動機付自転車での島の巡回ができるようになった。

1980年には火力発電所と水道水設備の建設が開始した。この火力発電所は台湾電力が設立したもので、核廃棄物処理場との関係で住民は生活に必要な電力については費用の支払いが免除されている。1987年には衛生所に人員が配置され、勤務を開始した。⁵⁷

○核廃棄物貯蔵場問題

蘭嶼島と中華民国政府との関係性に大きな進展をもたらし、現在でも蘭嶼島で大きな物議を醸している問題がある。それは1982年に設置され、現在も蘭嶼の最南端に置かれている核廃棄物貯蔵場である。この核廃棄物貯蔵場は海外メディアからの注目も集め、多くの記事が取り上げている。また日本では、桜美林大学の中生勝美教授が数多くの論文を執筆している。

この問題は1970年代に蘭嶼に駐留していた軍隊が台湾本島に撤退、その軍用地が跡地利用の名目で台湾電力に払い下げられたことに発する。⁵⁸その後1974年、行政院原子力委員会が「蘭嶼計画」を展開、その計画にはその跡地を一時的な核廃棄物貯蔵場として指定することが含まれていた。そして1982年、蘭嶼島の最南端に核廃棄物貯蔵場が設置され、第一回目の核廃棄物輸送が行われた。この際、台湾にある3つの原子力発電所と原子力発電実験施設からドラム缶10008個の中・低レベルの核廃棄物が蘭嶼島に持ち込まれた。⁵⁹蘭嶼島の住民に核廃棄物貯蔵場に関する事前の説明はなく、むしろ島民の雇用の機会を与えるために一般の工場を誘致するとの説明があったとの記述も残されている。⁶⁰また、この核廃棄物貯蔵場の設置には実際には以後50年にも渡って核廃棄物を放置させておくという台湾電力の思惑があったと一部のメディアでは報道されている。⁶¹これらの島民の意見を無視した核廃棄物場の設置は、住民の数々の反対運動を引き起こした。

反対運動は1987年に中華民国政府が蘭嶼島に対する戒厳令が解除し、民主化が進んだことで、発生が後押しされた。⁶²1995年には、反対運動も手伝って、台湾電力からの核廃棄物輸送が停止した。

反対運動を牽引していたのは蘭嶼のキリスト教団体だというのが、一方で、それ以外の住民はこれらの問題に対して意見表明を避けたという。彼らは、自らが抗議することで彼らの子供に対する奨学金を政府が保証しなくなるのではないかと恐れたと一部のメディアで報道されている。⁶³

この一件から、島民の中で中華民国政府に対する不信感が高まると共に、政府から受ける助成金により、ヤミ族と中華民国政府に依存的な関係性が構築されていることも表面化した。

○観光開発

蘭嶼に観光客が来るようになったのは1970年以降である。1971年に観光が解放され、その後観光誘致の体制が整えられた。1970年に初の観光客向けホテルである蘭嶼別館が誕生し、72年からは不定期だった航空便も、定期便となった。曾山(1999)も示したように、当時の蘭嶼観

光は、ヤミ族の「伝統文化」を主要な誘致要素として事業化された。観光地とされるものは部落内のヤミ族の居住地であり、そこで観光客がヤミ族の生活を見物し、時に写真を撮り、その対価として貨幣を支払った。その様子は、『蘭嶼觀點』（1993）にて生々しく描かれている。台湾人観光客が、洋服を着ているヤミ族に対し「原住民が服を着ているのはおかしい」と言い、わざわざ彼が着ている服を脱がして写真撮影をし、台湾人観光客からの行き過ぎた要求にしびれを切らしたヤミ族が、ヤミ語で彼らを怒鳴りつける場面が映し出されている。曾山（1999）はそのような観光客のヤミ族に対する行為が、ヤミ族を観光・観光客嫌いに変えたと今日蘭嶼で理解されていると述べた上で、同時に、当時の近代漢文化と文化コードを異にするヤミ族には観光という現象がそもそも理解できにくいのではないかと疑問を呈している。

1970年代の「蘭嶼観光」は、台湾島からの一方的な働きかけに始まり、漢人を中心に行われていた。しかし80年代からは、出稼ぎによって得た資金で、紅頭、椰油、郎島、東清の環島道路沿いに商店や飲食店を開くヤミ族が現れた。脆弱な経営が多く、観光客が減少するとともに、店を畳んだ者も多かった。また90年代には民宿経営を始めるヤミ族も現れた。それぞれ、紅頭と野銀に位置する民宿である。また、その後、政府がヤミ族による民宿経営とガイドの養成を支援していた。97年には民宿講習会を開いた。⁶⁴

この観光開発は現在でも続いており、当時よりも安定して観光客が訪れていることや出稼ぎヤミ族の帰島により、ヤミ族も自ら参画し始め、蘭嶼島の産業の多様化をもたらした。本研究の対象である文化工芸産業や、民宿や飲食店、ツアー（シュノーケリング、川登、ナイトツアー等）などの観光サービス業は現在、蘭嶼島の台頭する産業である。民宿に至っては、現在99軒が営業している。⁶⁵ヤミ族と台湾人の夫婦が経営するものも多く、1970年当時の両者との溝の大きい観光の実施とは違ったものとなった。飲食店の中には、台湾人経営による海辺に位置するバーなども存在し、近代的な観光地化が進んでいる。東清部落には夜市も存在し、観光客にとって夜の一大観光スポットとなりつつある。また観光地としての部落間の変化を生んだ。西南岸の部落は空港に近い比較的反響やかで、一方東岸の部落は完全な伝統文化を維持している。⁶⁶

始めは抵抗や論争、またヤミ族の間で観光に対する態度の違いから分立などを経験したものの、今では蘭嶼のひとつの産業として重要な位置を占めている。反発は蘭嶼島全体の近代化によって減少していったのだろう。

○消費社会の拡大

2014年には、24時間営業のコンビニエンスストア（セブンイレブン）が椰油部落に建設された。そして2017年に2軒目が東清部落に設立された。このコンビニエンスストアの設立は、島内外に賛否両論をもたらした。島外からは「ヤミ族の母語（ヤミ語）や独特の文化が破壊されてしまう」という反対の声があったものの、島内からは設立を支持する者が多かったようだ。蘭嶼郷長の江多利は、「蘭嶼が欲しているものを、なぜ台湾の人が反対するのか」と述べた。⁶⁷島民はすでに貨幣経済に適応し、便利なものを求め、消費社会の拡大に向かって変容していることが推測される。

1-1-3. 「外部」の認識

海洋交易に始まり、中華民国政府の統治に至るまで、数百年のうちに蘭嶼島は景観から生活、価値などあらゆる部分で変化を遂げてきた。特筆すべきは、中華民国統治下の蘭嶼島の近代化だろう。貨幣経済の流入に伴って産業が多様化し、消費社会の拡大が進んだ。しかし近代化がもたらしたものは、自治制度や貨幣経済などの社会秩序変容だけではなく、ヤミ族の社会的実践も変化したのである。彼らが集団を形成し、蘭嶼島で起こっている問題に対し声を上げること、また主体的に産業を開拓することで、来訪者との力関係が対等なものに近づいたことなど、ヤミ族の

意識や実践に大きな変化があったことは、注目したい。この変化がよりヤミ族と台湾人の密接な文化接触を促し、ヤミ族×台湾人の夫婦を増やし、蘭嶼島の変容を後押しするのである。

1-2. 島外へ出るヤミ族と台湾人

前節では島に訪れる人・ものを統治時代別に整理したが、本節では逆に、蘭嶼島から外、主に台湾本島へ出るヤミ族の外部接触をまとめる。

1-2-1. 戦後の台湾本島への出稼ぎヤミ族

中華民国統治下に置かれた蘭嶼島は、貨幣が急速に流れ込み、ヤミ族はより近代的な暮らしを求め、貨幣を手に入れるために、島外での出稼ぎを促した。ヤミ族が台湾本島へ出稼ぎに出る経緯と、台湾本島での生活から、彼らの中の蘭嶼島に対する意識がどう変化したのか考察する。

1-2-2. 出稼ぎの経緯とヤミ族の台湾本島での生活

政府が蘭嶼島に対して行った数々の近代化政策は、確実に蘭嶼島に貨幣経済、物質文化を持ち込み、それに対するヤミ族の反応の一つとして出稼ぎがあった。現在においても、若い男性ヤミ族を中心に、台湾本島へ出稼ぎに出ることが普遍化している。出稼ぎの経緯と、彼らの台湾本島での生活を、文献を元に整理する。

○出稼ぎの経緯

台湾本島への出稼ぎの歴史は1950年代まで遡ると、曾山（1999）は指摘している。1970年以降、労働集約的産業や基盤建設の現場労働などに就業するために、若者層の台湾島への出稼ぎは急増していったという。また、この背景には、1969年に国民中学校が台湾全土で義務教育となり、1972年から卒業生を出す、義務教育の延長が台湾島で生活するための社会化を強化し、島外流出を促したのではないかと推測している。⁶⁸しかし、ヤミ族の出稼ぎに対する明確な動機は示されていない。

鄭・古谷（2004）は、ヤミ族が出稼ぎに行くようになった背景として、国民住宅建設が関係しているのではないかと推測している。彼らは、国民住宅建設とほぼ同時に、蘭嶼島にも急速に貨幣経済が入り込んだと指摘している。それまで自給自足の生活を送ってきたヤミ族にとって、島の中で現金収入を得る職業は乏しかったため、島の外へ出稼ぎに行く者が急増し、島に戻り台湾本島と同じ造りの家屋を蘭嶼島に建て始めたのだという。⁶⁹国民住宅の増改築のための資金集めが出稼ぎのモチベーションとなった可能性は十分ある。

蔡（2009）は、1950年代末、1960年代初期に台湾にて製造業が始まり、あるMartinson Kieth Barryという一人の神父が台湾出稼ぎの第一波となるヤミ族の青年たちを台湾に連れてきたと記載している。⁷⁰ヤミに受け入れられている神父という存在が、ヤミの出稼ぎ促進に一役買ったのかもしれない。

また、兵役が1950年から始まったことにより、そのまま台湾本島に居座り、出稼ぎを開始した可能性も十分にある。

1986年に蘭嶼郷公所が行った調査によって、ヤミ族人口全体の1/4の、719人が台湾本島のヤミ族労働者であるということが判明した。⁷¹この時点ですでに、若い男性ヤミ族の中で台湾本島に出稼ぎに出ることが彼らの生活に組み込まれていたといえる。

○ヤミ族の台湾本島での生活

ヤミ族が台湾本島での出稼ぎを通じた経験については、蔡友月（2009）の「達悟族的精神失序：現代性、變遷與受苦的社會根源」に詳細が記されている。蔡は、台湾原住民の職業環境は通常、最も「深」く（炭鉱、トンネル）、最も「高」く（鳶）、最も「遠」く（遠洋漁船）、最も「暗」い（水商売、性風俗）で形成されると述べている。戦後の台湾の経済発展に伴い、原住民

はこれらの最下層で最果ての仕事を大量に補填し、次第に資本主義の分業化の一端を担っていったのだ。その中でも、ヤミ族は他の台湾原住民に比べて台湾への移住の歴史は浅く、更に人口も少ないため、社会資本を蓄積することも困難であり、そのため就業と生活適応に関し、他の原住民と比べて不利であると指摘した。

また、1960年代中期の後、一番はじめに台湾へ渡ったヤミ族達の多くは台東或いは屏東一体で林業に就き、底辺層の労働力を補ったと述べている。1970年代初期、ヤミ族は林業を離れ、運送業者、鉄筋業者、建築鉄工業者或いはセメント業者に就き始めた。そして、1970年代中期以降、タオ族は続いて工場作業員、紡績、染色、服飾、掃除、金属プレス、革、家具、メッキ、靴などの部門に入っていったという。ヤミ族は漢人に比べて10年遅く台湾産業部門に参入したため、彼らが担ってきた産業は往々にして台湾ではすでに斜陽産業であった。多くの危険性が高い建築や非技術的な職業、当時の台湾の若者の大多数が望んで従事しないような職業が、次第にヤミ族の男性に取って代わられた。ヤミ族は人口が少なく、社会関係も不足していたため、資本主義商業のロジックの学習の開始が遅れ、貨幣の仕様や市場の仕組みのロジックにおいても低度の能力開発に留まっていたと推測している。近年（2009年当時）のヤミ族の職業毎の比率によると、彼らが金融、銀行などの商業部門に仕事に就くことは極めて少なく大企業の管理職層はほぼゼロ、通常専門性、商才に欠け、職業別に見ると圧倒的多数がやはり農業牧畜業であり、上に上がる余地を作り出すことは容易ではないのは自然なことだと指摘した。⁷²

出稼ぎヤミ族は度重なる転職と厳しい労働環境を経験した。近代的な労働市場に飲み込まれた彼らが苦勞をしたのは、仕事内容だけではない。蔡は、出稼ぎヤミ族へのインタビューで、彼らの職場内の問題を明らかにした。一部の出稼ぎヤミ族の中には、ネガティブな文化衝突を経験した者もいるという。ヤミ族は食、衣、住、言語、姓名、葬儀など全ての文化設計が基本的に漢文化と絶大な差異がある。漢文化を主とする漢人社会の台湾に来て、彼らは伝統文化がもたらす挫折や圧力に向き合わなければならなかった。これらは、漢人のヤミ族に対するステレオタイプによって生じた。例えば、「スカートあげたら下にはふんどし履いてるの？」と聞かれたり、原住民は飲酒を好み、ビンロウを食べているというステレオタイプから、自身が飲酒をしないことを表明すると、「原住民は酒に強いんじゃないのか？」と笑われたり、外観上皮膚が黒く顔立ちがはっきりしていることからある者は度々警察に不法労働者とされることもあったそうだ。閩南民系を主とする漢人社会に行くと、工場や工事現場などの状況において、台湾語を話せないヤミ族は嘲笑の対象になったという。漢人社会からの偏見や蔑視が、ヤミ族の失業率が他の原住民に比べて非常に高い理由の一つでもある。⁷³

彼らの中には、上の世代からヤミ族の伝統文化の薫陶を受けて成長し、同時に現代教育の洗礼も受けた人もいう。異なる暮らしや価値に揉まれ、傷を負いながら、自分が何を信じれば分からずに混乱した者もいたはずである。事実、精神病を発症したヤミ族も多数存在する。それは彼らの生活の問題が、職場だけに留まらなかったことが関係している。それは、彼らが抱える経済的な圧力である。

早期に来台したヤミ族は「貯蓄」の美德を習得することが困難であっただけでなく、財産管理能力も欠如していたという。これは、ヤミ族の伝統文化はシェアと知恵の共有を強調する者であり、富を誇示する宴請（ご馳走する宴会）（例：房屋落成禮）を通して自身の社会地位を顕示するからである。上述の最も早く台湾に来たヤミ族は、通常私有財産の観念を欠如しており、財産管理や貯蓄が苦手であるために、稼いだ金銭をよく運用することができなかった。中には、収入が少ない仕事を転々とし、お金を貯めることもできず、高額な交通費を払えないために蘭嶼島に帰ることができない者もいたという。あるヤミ族は、資本主義の消費習慣に飲み込まれ、お金を稼いでいないにも関わらず夜の店などに行き、大量の債務を負った。⁷⁴また近代化が進んだ蘭嶼島においても、貨幣に価値が置かれるようになり、故郷に帰ると父母もお金を求めている。しかし、出稼ぎヤミ族が労働力を売って得る対価では家庭の生計を負担するのは困難である場合が多かった。

厳しい労働環境課に置かれたヤミ族は、技能の要求程度が低く技術の蓄積がない職業を転々とし、財産管理が苦手である上に収入が少なく、支出が大きい台湾での生活に苦勞したのである。⁷⁵

現在では、蘭嶼島に住む者も消費社会に慣れている。出稼ぎに出た者が家族に渡さなければならない金額も増えていることが予想できる。出稼ぎヤミ族の置かれている立場はより切迫したものとなり、彼らの中で自己と他者との差別化を図ろうとする者も増えていくのではないだろうか。

1-2-3. 「蘭嶼」の認識

出稼ぎヤミ族は、台湾本島での文化接触で、ポジティブにもネガティブにもヤミ族と漢人を比較するようになり、その対比は、蘭嶼島ヤミ族というアイデンティティーの芽生えにつながったと考えられる。出稼ぎの歴史は短いものの、出稼ぎヤミ族の中の意識的な変容は急速に進められたのではないだろうか。次章では、蘭嶼島にて伝統工芸品の製作・販売を行う出稼ぎ後、帰島したヤミ族へのインタビューを分析し、出稼ぎがもたらした彼らの意識的な変化を考察する。

第 2 章 文化接触から生じる主体性の変容

本章は、出稼ぎ経験や文化接触の中で、ヤミ族にどのような意識的な変化が起こったのかを考察する。中でも、蘭嶼島にて伝統工芸品の製作・販売をするヤミ族へのインタビューから、出稼ぎ経験や文化接触が彼らにもたらした変化を分析する。

2-1. 伝統工芸品を売るヤミ族の出現

近年になって、蘭嶼島にヤミの伝統工芸品を販売するヤミ族が出現した。彼らは蘭嶼島の観光シーズン（4月～9月）に合わせて、各部落周辺の環状道路沿いに露店を構え、自分で作ったアクセサリーやキーホルダーなどの工芸品を売る。このような工芸品の露店は主に、ヤミ族と台湾人によって営まれている。その中の類型は、ヤミ族×ヤミ族の夫婦、ヤミ族×台湾人の夫婦、台湾人×台湾人の夫婦、ヤミ族個人、台湾人個人に分類することができる。今回はその中でも、ヤミ族×ヤミ族の夫婦、ヤミ族×台湾人の夫婦、ヤミ族個人の工芸品製作・販売者に対象を絞り、2018年8月31日から9月5日にかけてインタビューを行った。以下がインタビューを受けてくれたヤミ族、もしくはヤミ族×台湾人の夫婦である。類型は、ヤミ族×ヤミ族の夫婦はA、ヤミ族×台湾人の夫婦はB、ヤミ族個人はCとする。この場合のヤミ族個人は、伴侶を持っている場合でも商売を一緒に行っていない場合は個人と見なす。

	名前（店舗名）	性別	年齢	類型	出身部落	インタビュー日時
1	仮名K	男	—	A	漁人部落	2018年8月31日
2	仮名F	女	—	B	漁人部落	2018年9月1日
3	鍾文明（海時光・紙巴士）	男	35	B	郎島部落	2018年9月3日
4	江百琦（魚尾人手工坊）	女	49	A	朗島部落	2018年9月3日
5	李月蘭（伊娜傳統手工藝品）	女	60代	C	朗島部落	2018年9月3日
6	張林山（蘭嶼山林作品）	男	50	C	東清部落	2018年9月4日
7	仮名B	女	—	B	東清部落	2018年9月4日

また、工芸品を製作・販売していない島民や、工芸品を製作・販売している台湾人からも話を聞くことができた。彼らの名前とインタビュー日時は、彼らの語った内容と共に適宜示す。インタビューが匿名を希望した場合には、滞在部落と職種のみで個人が特定可能な場合があるので、その場合は滞在部落とインタビュー日時のみ記載する。

2-2. 工芸店経営ヤミ族のライフヒストリーと変容の実態

上記のインタビューから、出稼ぎ、またはヤミ族と台湾人との出会いから生じる文化接触がもたらした彼らの変化について考察する。

○「蘭嶼」という単位の誕生

郎島部落出身のヤミ族で、台湾人の妻と民宿と工芸店を営む鍾文明さん（インタビュー表3）のインタビューでは、彼が蘭嶼島をひとつの単位として捉えていること、また蘭嶼島の変容に関して、自分たちのような出稼ぎした者が蘭嶼島に戻ってくること、蘭嶼島ヤミ族の思考が変化したと推測していることを教えてくれた。鍾さんは1983年に生まれ、2002年から2004年まで、

1年10ヶ月間の台湾本島での兵役を経験した。鍾さんは小学校も中学校も行っていない。兵役後はそのまま、台湾本島での就業に移行した。初めの2年間は車の工場などで働きつつも転職を繰り返したが、その後3年間は不動産を扱う企業で働き、2008年に蘭嶼島で民宿営業を開始したという。現在は観光シーズンのみ蘭嶼島で暮らしており、それ以外は台湾で暮らしている。2004年に民宿で出会った台湾人の女性と結婚し、それと同時に工芸店を開いた。工芸店を開いたきっかけとして、出稼ぎ時代に華山1914という台北の松山にある大型観光施設で働いたことにより、物の売り方を覚えたことが影響しているという。鍾さんは調査に対して非常に協力的だった。会話の一部を抜粋する。

問：何月から何月はトビウオ食べるな、みたいなトビウオの禁忌とかあるけど、それについてどう思う？

鍾さん：いや、ちょっと待つて。こう言うべきだと思う。3月から6月がトビウオ期だけど、それ以外でもトビウオが取れるなら食っていいんだよ。昔と今は違うからね。

問：いつからそういうヤミ族の考えは変わったの？

鍾さん：先に言いたいんだけど、俺らは原住民じゃないよ。「蘭嶼國」の人間だ。(ポストカードを手に取り、見せてくれる)

問：ごめんなさい。で、何時頃から変わったの？

鍾さん：文化接触から変わった。人類はいつもそうだよ。蘭嶼は不便なところ。台湾は便利。台湾に接触してからだね。

問：セブンイレブンができたくらいの時から？

鍾さん：いや、もっとずっと前。蘭嶼の人が台湾に行って仕事して帰ってくるようになってから蘭嶼の人の思考は変わった。観光客は関係ないよ。

鍾さんが言う「蘭嶼國」は、鍾さんらが作るポストカードにも書かれていた。鍾さんは続けて、蘭嶼にいた頃は、情報が少なく自らの直感を軸に生きていたが、台湾は情報に溢れており、思考の方法が異なるということを解説してくれた。ヤミ族は直感が鋭いと言っているようにも解釈できた。

出稼ぎで近代化した生活を経験したヤミ族は、漢人から貼られる「原住民」というレッテルから、嫌でも自分の故郷や生まれについて考えなければならなかったのかもしれない。その中で、客観的な思考を育て、「蘭嶼國」というひとつの単位として蘭嶼を見るようになったのだ。

出稼ぎを経験したことがないヤミ族にとって、蘭嶼をひとつの単位として捉える機会は少ないのではないか。東清部落に住む80代の仮名Aさん(2018年9月2日)にヤミの伝統工芸品についての話を聞いている際に、彼の語り口は、部落単位のものだった。他の部落のことは知らないとも述べていた。ヤミが「ヤミ族」として接されるのは異文化を持つ他者との接触によって起こる。出稼ぎによって初めて自分が「蘭嶼」出身の「ヤミ族」となる。そして彼らが、蘭嶼の中に蘭嶼らしさを生むきっかけを与えている可能性がある。出稼ぎに出ていないヤミ族であれ、観光客と日常的に接しているヤミ族の中には、すでに「蘭嶼」という単位が生まれている可能性もある。漁人部落で10年以上服を売り、3年前から工芸品を売り始めたヤミ族の夫婦は、彼らが売る商品を、「蘭嶼のもの」だと表現していた。

どのような形であれ、台湾漢人との接触が多ければ多いほど、自分が蘭嶼ヤミ族の一部であるという意識が育まれるのかもしれない。ともするとそれは、小・中学校の義務教育を経験していることにも関係がある可能性もある。もうすでに蘭嶼島は近代化が完成しつつあり、そこに住まう若年ヤミ族は、台湾を、また台湾と対比して生まれる蘭嶼島を意識しなければならない環境に置かれているのだろうか。この点については、さらなる検討が必要だろう。

○文化伝承者としての自己

朗島部落は、観光客向けの飲食店なども少なく、未だに伝統的な景観が色濃く残る部落である。そこで工芸品店を営む江百琦さん（インタビュー表4）は、自らが製作・販売する工芸品によって蘭嶼ヤミ族の文化を伝承することに誇りを持っている。

江百琦さんは1969年に生まれ、高校入学時から台湾本島で暮らし、その後そのまま台湾で就職した。同じくヤミ族の夫との間に子供が生まれたものの、子供が小学校に入学する1998年に無償で教育が提供されると蘭嶼島に出戻りしたという。工芸品店は夫と共に2年前から営んでおり、アクセサリ類を江百琦さんが、木製の30cmほどの船の模型を夫が製作するという。露天に立つのは妻の江百琦さんである。オフシーズンにはサツマイモ畑で農業を営んでいる。江百琦さんは嘗て国語の教師で、ヤミ語を教えていたそうだ。また、ヤミ族の踊りを教えていたこともあるという。彼女は、彼女が作る商品は、そういったヤミ族の文化と結びついてると述べていた。

江百琦さんの暮らしや話の特徴的な点は、蘭嶼島の伝統的な要素が生活に未だに根付いている点である。彼女は蘭嶼島で唯一、未だに自分で植えた植物の種を使って、アクセサリを作っているのだという。この種について江さんは、「昔、文化接触がなかった時から、老人がつけてたものと同じだよ。これをつけてるとアニトが動けなくなるんだよ。イヤリングも、これはあまり可愛くないけど、アニトが来なくなるからつけていたんだよ。」と教えてくれた。また、貝でできたペンダントトップについても、「私たちは海のものや山のものを使って売ってるんだよ。」と語っていた。サツマイモ畑、ヤミ語と踊りの教師、アニト、海・山の自然など、彼女の来歴や話を聞いていると、「伝統的であること」について理解し、それを体現しているように感じた。

また、「伝統を守ることと売ることと同じだと思うか？」という問いに対して、「同じだと思う。観光客に蘭嶼の文化の意味を伝えることができるから、蘭嶼の文化を広めることにつながる。広めることはとても美しい(直訳)と思う。他の人が文化を語らずにただ売っているだけならそれは失敗だと思う。それはただの利益の追求で、文化を伝えてはいない。」と答えていた。

江さんはヤミの文化の伝承者であるという意識が強いと感じる。江さんのようにヤミ社会の中でも文化人であるという態度は、蘭嶼島で観光業に従事する上で観光客からより需要のあるものである。

江さん同様、工芸品製作・販売者はヤミ文化の伝承者であるという意識が強い者が多いのではないだろうか。工芸品店にはそれぞれ店舗名と名刺が置いてあることが多い。彼らは皆同様に、商品が自分手作りということに誇りを持っている。外部者に対して、ヤミの一部である自分を誇りに思い、ヤミ文化伝承者としての立場を確立していったと考える。

○使命感の芽生え

出稼ぎヤミ族の中には、自らの使命を見つけた者もいる。張林山さん（インタビュー表6）へのインタビューと、彼が出演している映画『蘭嶼工芸家』から、彼が蘭嶼島の工芸品創作を通じて、自分の夢、使命が芽生えたという物語について考察する。

張林山さんは1968年に生まれ、江百琦さん同様、高校入学時から台湾本島で暮らし、その後そのまま台湾で就職した。東清部落にて一人で工芸品を製作・販売している唯一の男性である。観光シーズンの時のみ蘭嶼島に出戻りし、オフシーズンは台湾で暮らしているという。彼は蘭嶼にある核廃棄物貯蔵所で働いていたこともあるという。しかしその後、貯蔵所に対する反発が高まり、自分の子供も反対活動に参加していたことから、蘭嶼島で他にできることを探した際に出会ったのが、工芸品製作だったという。祖父に習った影響で、30年間物作りをしており、十数年前から蘭嶼にて販売を開始した。元々は浜辺で拾った石に、フクロウなどの絵を描いて販売していたが、現在はアクセサリを製作、販売している。彼は、工芸品製作を通じて自分の創造力を

開拓していったという。その時に工芸品は女が作るものだという目を向けられ、からかわれたこともあったが、「自分の好きなことをする」という意思に基づき、販売を続けた。また彼には、工芸品製作（創作）が自分の部落の経済に新たな道を見出すとともに、部落のより多くの人がこの工芸品創作活動に参加し、生活水準を上げるという夢があると語っていた。⁷⁶

この「自分の好きなことをする」という意思是、ヤミ社会の歴史上極めて稀だろう。ヤミ族社会では、足並みを揃えることが重要だった。このような自由意思の出現は、出稼ぎでの経験、また、身近で起こった核廃棄物貯蔵所の反対運動が影響しているかもしれない。近代的な経験、また特に台湾本島での辛い職探しは往々にして主体性の変容に作用しているだろう。彼らはそのような経験を通じて自己を発見したのである。

また、同じく東清部落出身ヤミ族の仮名Bさん（インタビュー表7）も、蘭嶼島の看護・医療を改善することを使命を見つけたという。Bさんは台湾本島での出稼ぎを経験してはいないが、台湾人の夫のCさんとともに民宿と工芸店を営んでいる。今回はBさんが台湾に出かけており不在だったため、Cさんに話を聞いた。

Bさんは東清部落出身のヤミ族である。Bさんは島で唯一の衛生所で勤めていた看護師であった。Bさんは衛生所で訪問看護をしていく過程で、ヤミ族の医療に関して問題意識を持ち、自分で訪問看護センターを設立したのだという。蘭嶼では、女性ができること、男性ができることの区別がはっきりとされている。例えば、子供が父親の世話をする場合、息子が世話をしなければならない。父親にとって娘に世話をされるのは屈辱的なことであり、彼らはしばしば娘から世話をされること拒むのだという。しかし、台湾への出稼ぎにより、蘭嶼から男性が減り、男性高齢者の世話をする人がいなくなってしまう。看護や医療に障害が生じていたことを目の当たりにしたAさんは、自分がこの状況を打破することを自分の使命だと感じ、2013年から訪問看護センターを始めるに至ったという。夫のCさんが蘭嶼島に移り住んだのは2010年だ。BさんはCさんと一緒に土地を切り開き、2012年から民宿営業を開始した。Cさん工芸店を営む理由は、民宿の建設費や、自分の訪問看護センターのための医療用品代や人件費を払うためだという。

Bさんは台湾への出稼ぎ経験はないが、台湾本島をよく訪れているという。Cさんのような台湾人との出会いは、Bさんの行動の柔軟性に少なからず影響しているはずである。異文化を持つ近い人物は、お互いの文化に対する理解を深め、それが最終的に、個人の考え方や価値の変容をもたらすこともあるのではないか。また、ヤミ族と台湾人の夫婦は、ヤミ社会の中で特別な存在である。その特別な社会的位置こそが、ヤミ族社会に対して変化をもたらしやすいと考えられる。今後も変わっていく蘭嶼島で、ヤミ族と台湾人の夫婦が島にもたらす影響は大きいと推測する。

2-1-3. 文化接触がもたらした変化

出稼ぎ、もしくは島内での文化接触を経験したヤミ族は、自身の認識や意識にも、また蘭嶼島にも様々な変化をもたらした。「蘭嶼」というひとつの単位で捉えることにより、外向きの「蘭嶼らしさ」の発展に繋がった。それはのちに、伝統工芸品の製作などに表現されることになる。また、出稼ぎを通じて台湾本島の労働市場にさらされたヤミ族は、近代的な経験を通じて彼らの中で強い主体性を生んだ。足並みを揃える社会秩序から離れ、自分のしたい暮らしを追求した。工芸店で稼いだお金で家族を養う者、出稼ぎで学んだ商売知識を蘭嶼で生かそうとする者、自分の創造性を見出して「好きなことをする」という意識の芽生えを発見した者など、彼らの中で確立した自己が発見されたのである。また、出稼ぎに出ていなくとも、ヤミ族と台湾人夫婦という異文化を分かち合う関係によって、彼らの生活がより柔軟なものとなり、自身の問題意識、問題

解決に影響を与えているのではないか。彼らのような強い主体性を持った存在は、蘭嶼島という島の変容に大きく関与しているだろう。

また付け加えるならば、彼らのようなヤミ族の存在は特殊であるだろう。例えば、出稼ぎに出たヤミ族の中でも、自ら商売を始められるような者は少数である。蔡（2009）も指摘していたように、当時のヤミ族の職業毎の比率を見ると、彼らは商才に欠けていると言われており、職業別に見ると圧倒的多数がやはり農業牧畜業である。確かに、工芸品店経営ヤミ族へのインタビューは、他の多くのインタビューと違って、回答が客観的である傾向が強いように感じた。また、学者という存在も、彼らが収入を得る方法の一つである。一部のヤミ族は、どのような回答が学者のような外来者が求めているのかを理解しているようであった。彼らは、学者とのコミュニケーションに慣れており、それ故定石通りに淡々と質問に答えてくれるのだと思われた。彼らは完全に近代のロジックを活用して商売をしている。出稼ぎなどの近代化に応じてお金を稼ぐこと、貯めることに対して非常に敏感になった人々は、蘭嶼島でお金を持っている人の方が偉いという価値に変わったことも敏感に感じ取っている。彼らはより商売人として躍進していくだろう。

第 3 章 出稼ぎヤミ族が担う蘭嶼の伝統文化

前章では、蘭嶼の伝統工芸品を製作・販売する担い手の経験や意識に焦点を当て、彼らの主体性の変容を明らかにした。3章では、彼らが行う工芸品製作・販売を詳しく扱う。そこから彼らにとっての伝統とは何かを考察する。

3-1. 伝統工芸品店の実態

漁人部落の仮名Kさん（インタビュー表1）によると、蘭嶼の観光客は2010年から増え始めたという。その観光客増加を機に、観光客向けに工芸品を製作・販売をするヤミ族と台湾人が増え始めた。本節では、主にヤミ族とヤミ族×台湾人の夫婦が営む工芸品店がどのように展開されているのかを整理する。

3-1-1. 工芸品店の概要

2010年に観光客が徐々に増え始め、それに伴って観光客向けに店を始める者が増えた。その後2015年に工芸品店を始めた店が多くを占めた。移動販売車を購入して商売を始めることがほとんどであるが、自分たちで小屋を建て、経営する場合もある。工芸店は部落内外に位置し、部落外の場合は五孔洞や青青草原などの観光スポット周辺を拠点としている。担い手となる人物の年齢は20代から60代まで多様であるが、若い世代は台湾人に多く、ヤミ族には20代の者はいない。主にヤミ族と台湾人によって担われている。これは台湾文化の影響なのか、名刺を持っている店が多い。商品はポストカード、アクセサリー、Tシャツと自由であり、値段も自由である（同種商品の価格の決定・合意などは存在しない）。ディスプレイは綺麗に陳列され、アクセサリーを扱う店の場合は鏡などが設置されていた。

3-1-2. 工芸品店の担い手と商品

本節では、工芸品店の担い手、場所、営業時間、商品、工芸品店の歴史に分けて、工芸品店の実態を明らかにする。

○担い手

工芸品店の担い手は、大きく5つの類型に分けることができる。それは、ヤミ族×ヤミ族の夫婦、ヤミ族×台湾人の夫婦、台湾人×台湾人の夫婦、ヤミ族個人、台湾人個人である。蘭嶼における伝統的地位は、簡単にいうと、結婚をしているか+年齢で決まる。（鄭2004）また、経済単位が家族であるために（外山1979）このような商売を夫婦で行うことも多い。また、たとえ台湾人であれ、ヤミ族に嫁ぐことで、部落内で商売をすることに社会からの抵抗が少なくなるのではないかと。もしくは、すでに上記のような社会秩序は、蘭嶼島では重要ではなくなってきているのかもしれない。類型ごとの構成については、ヤミ族×台湾人夫婦が目立ち、台湾人×台湾人夫婦は稀である。

○場所

蘭嶼島には現在、10店舗以上の工芸品店がある。それらのほとんどは蘭嶼島の海岸線沿いに位置する環状道路を沿うような形で出店されている。部落周辺だけではなく、部落から離れた場所にもお店は存在する。現在の蘭嶼島には、小規模であるがいくつか観光スポットとして扱われている場所があり、その観光スポットの周辺にも出店されている。インタビューで明らかになった

ことは、ヤミ族と婚姻関係を結んでいない台湾人は部落外で露店を出すことが多いということだ。青青草原という場所の前で露店を営む台湾人女性H氏（2018年9月1日）は、部落の中で露店をやることは勇気の要ることだと言っていた。しかし同時に、露店を経営することそのものに関しては、「蘭嶼を盛り上げてくれる存在」として歓迎されるのだという。露店の他に、台湾人が経営している民宿も、部落とは少し離れた場所にあることが多い。ヤミ族が、自分たちのテリトリーを台湾人に示したという事実は、蘭嶼観光が促された当初のヤミ族の受け身の観光とは異なったものである。

○営業時間

営業時間は不規則な店舗が多い。自分が他にしたいことがあればそれらを優先して店を開かない場合もあるし、同時に民宿を経営している場合、シフトの関係上不定期にならざるを得ない場合もある。しかし、ヤミ族×台湾人の夫婦は比較的、決められた時間に営業している場合が多い。商売っ気が強ければ強いほど、定期的に営業をしているし、場所も人が集まる場所に店を設置している。

○商品

商品はポストカード、アクセサリ、Tシャツと多種多様であり、値段設定は自由である（同種商品の価格の決定・合意などは存在しない）。材料となるビーズやカードの土台などは、基本的には台湾で購入しているが、中には、自分で植えた植物の種、海岸で拾った貝を使って作る者もいる。ポストカードの場合は、自分で写真を撮り、台湾で印刷をする。Tシャツの場合も、自分でデザインし、それを台湾で生産する。特にアクセサリ類を製作している者たちは、ほぼ全員が、「自分で製作した」と強く主張する傾向があった。

また、これらの商品は全て、蘭嶼島の伝統工芸品として売られている。蘭嶼の伝統的な色である赤・黒・白を基調としたアクセサリや、フクロウや飛魚をモチーフにしたポストカードなどが人気だという。かつては「フクロウを見たら、その部落の人が死ぬ前兆」という呪いの象徴として言い伝えられてきたフクロウも、今では島の象徴として、ネックレスのペンダントトップに付けられている。しかし中には、伝統的な色使いには拘らず、様々な色でブレスレットなどのアクセサリを製作する者もいる。

○観光客向け工芸品店の歴史

これまでも、観光客相手に蘭嶼の工芸品を売る動きはあった。『蘭嶼觀點』（1993）というドキュメンタリー映画には、当時の蘭嶼観光が映し出されている。その中にも、台湾から来たバスガイドが、観光客を島にあるお土産店へ案内していた。また、過去には粘土の人形や服を扱うこともあったというが、現在は観光客のニーズに合わせた商品が販売されている。この商品の変遷は、同じ担い手が商品を変えただけではなく、担い手の変遷の結果と言えるだろう。観光客のニーズを把握するということはまず、彼らとのコミュニケーションが必須となる。中国語の会話ができ、商品を製作でき、なおかつ商売ができるヤミ族は、出稼ぎを経験した者か、もしくは台湾人と親密になり、知恵を交換することができる者だろう。出稼ぎと、またもしくは蘭嶼島の台湾本島との心理的距離が近くなったからこそ、商品の変容がもたらされた。

3-1-3. 門戸としての機能

上記のような、工芸品店担い手のヤミ族とヤミ族×台湾人の夫婦は、現在、島で唯一と言ってもいいほどの蘭嶼文化と観光客をつなぐ門戸であると言える。彼らは営業文句や雑談、また彼らが製作したを通じて、蘭嶼島の伝統文化を広めていくのである。蘭嶼島の観光業の中にはこの工芸品店以外にも、民宿やレストラン、ツアー（シュノーケリング、川登、ナイトツアー等）など

が存在する。しかしその中でも、事前の手続きなどが一切不要で、最も観光客に広く近づくことができるのが、露店で行われている工芸品販売だろう。島を歩けば、一軒は目に入る。ディスプレイも興味を引くものばかりであるし、肝心の販売人も自ら話しかけてくれる。彼らが蘭嶼文化と観光客をつなぐ門戸であり、また彼らを選んだ伝統がこれからの蘭嶼の伝統として残されていくのである。

3-2. 伝統とは何か

本節では、蘭嶼の工芸品店担い手にとって、蘭嶼の伝統とは何かを、彼らが蘭嶼の伝統文化の中でどのようなものを選択し、販売しているのか、彼らの売っている商品や、観光客向けのディスプレイから考察する。

3-2-1. 記憶され残される伝統

観光客向けに売る商品は時代と共に変化してきた。これらの商品は、観光客の故郷に持ち帰られ、記憶される。工芸品の製作・販売者が自ら蘭嶼の伝統を選択し、変容させていくことを明らかにした。商品の具体的な考察から、彼らの思う蘭嶼伝統を考察する。

3-2-2. 工芸店ヤミ族が伝えること

ヤミ族工芸品の製作・販売者は、自らの名前と店名が書かれた名刺を持ち歩き、商品に込められたストーリーを話してくれる。彼らは、ヤミ族の文化を伝承するという自己意識の傍、自分の創造力を掻き立てて、好きな商品、或いは売れる商品を作る。この自己表現としての工芸品は、自らが営んでいるのは単なる工芸品店ではなく、他とは違う、自らが創作した商品を販売している自分だけの工芸品店であるという意識を掻き立てる。これらの意識こそが店舗によって異なるオリジナリティとなり、彼らの伝統解釈は商品に表現される。以下はそれら商品についての考察である。

○商品

どのような商品を販売するかを選択・決定は、大きく製作者に依存している。まず蘭嶼島で工芸品店を始めることに対して特別な許可は必要なく、自分の好きな商品を販売して良いため、自らが製作可能な商品・好きな商品を扱う傾向が強い。これが、観光客が店によってそれぞれ違った印象を受ける原因の一つである。しかし、売れなくては店が続かないため、販売する過程で商品を変えてきた担い手も多い。例えば、カードをポストカードに変えたり、服を売っていた者や石に絵を描いたものをアクセサリに変えたりするなど、商品を客のニーズに合わせて変化させるのである。変化を遂げた商品は、観光客のニーズに合わせてつつも、やはり自分の好きな写真を加工して販売したり、自ら良いと思う物をデザインしたものであることが多い。

大多数の店はブレスレットやネックレスなどのアクセサリを主に販売している。アクセサリを販売しつつポストカードや写真、Tシャツ、バッグや手提げなどを販売する者もいるが、少数派である。また言うまでもないが観光客相手の商売であるため、観光客が蘭嶼島の土産物だとわかるような印、シンボルが描かれている。

○彼らが売る商品の色とシンボル

例えば、シンボルにも色彩で表されるものと、模様や物体によって表されるものがある。

蘭嶼の伝統色は、赤・黒・白と言われている。この色は、タタラやチヌリクランなどの伝統船を装飾するのに使用される色である。赤（朱）は赤土、黒は煮壺の底についている煤、白は夜光貝を焼いてできた石灰なのだという。⁷⁷戦前から使用可能であった色が今になっても伝統色として残っているのだろう。

また、シンボルとしてはマガマオグという人形紋（図2⁷⁸）と、マタノタタラという船の目（図3⁷⁹）がある。マガマオグは、人の様な形のシンボルで、手と頭の先が渦巻いている。これは手をつないでいる姿を表しているという。⁸⁰この模様は「守る」という意味があるらしい。マタノタタラは円形で、円の中には2つの円があり、合計3つの円の間に三角形の模様が描かれている。マタノタタラは太陽だと考えられているという。⁸¹伝統的にはこの船眼は船の前と後ろの左右、合計4つついており、海上で迷うことがないようにつけるという。

この蘭嶼の伝統色を使ったアクセサリーや、シンボルが刻まれているキーホルダーなどは、最もよく見受けられる商品群である。しかし、これだけではなく、青や水色、黄色など様々な色彩を使用した商品や、トビウオやフクロウをモチーフにした商品も売られ始めている。

図2

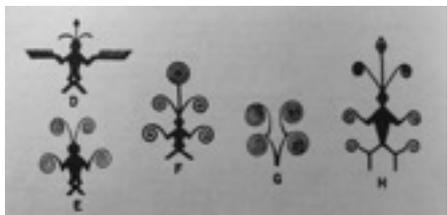


図3



○価格

価格設定は製作者・販売者の自由である。同種商品の価格の決定・合意などは存在しないため、収益比率設定も彼らの商売の成功を決める一つの重要な職務である。しかし、店舗ごとの価格設定に対する差は感じられない。ポストカードや絵、写真などは30-80元、ブレスレットは200-300元、ネックレスは250-350元、Tシャツは400元程度であった。しかし全ての店舗が値段表記とともに商品をディスプレイしているわけではないので、その場合、購入時に都度価格が決定されている例もあろう。

○材料

アクセサリー類はビーズとボタンで製作されているものが目立つ。このビーズなどの材料は台湾本島から仕入れたものがほとんどであるが、自分で植えた植物の種や海岸で拾った貝などを加工して商品化する者もいる。アクセサリー類について、現在販売されているアクセサリーと戦前に作られていたアクセサリーの違いは、材料が変わったことだという。嘗ては携帯することでアニトを動かなくさせるという植物の黒い種を使って製作していたものが、今はビーズや、台湾本島で取れた種に代用されたのだという。60代工芸品製作・販売者の李月蘭さん（インタビュー表5）は、「昔は石のとがったところで穴をあけ、アクセサリー作っていたから大変だった。ビーズに変わったことにより、大量生産できて良い。」と言っていた。また、この材料の変化について、「台湾人がたくさん住んでるからだよ。蘭嶼で一番最初に台湾人が住み始めたのは紅頭だよ。昔は2日かけて紅頭まで行ってたんだよ。」と述べていた。戦前から使用されていた外から持ち込まれたものといえば、日本軍が渡したとされるプラスチック製のボタンだろう。このボタンは現在でもブレスレットやネックレスに使用される。

○伝統芸術との比較

現在販売されている工芸品は、古くから伝わるヤミの伝統芸術から発展して、商品として製作・販売する機会が多い。

李さん（インタビュー表5）によると、ヤミ族にとってもともとアクセサリーは価値がつけられないものであり、家庭内で個人的に使用するものだったという。ラカと呼ばれる大きな胸飾が主に身につけられていた。当時の胸飾は非常に大きく、また長さも脚の付け根よりも垂れ下がっていた。（写真1参照。⁸²）しかし現在は、当時のアクセサリーから発展したものが商品化され、売られている。伝統的に使用されたネックレスについている貝のペンダントは、伝統的には貝がネックレスの半径に複数ついていたものが、ワンポイントに1つだけつけられて売られている。（写真2のD⁸³、3参照。）ブレスレットについては、伝統的なものに比べ、現在の主流な編み方は複雑で変化している。（写真4を参照。）

また、元来捕獲した魚を入れておくために使用されていた伝統的な網の手提げ袋が、プラスチックの紐で製作され、売られている例もある。

商品の展開は、製作者に大きく依存するため、変遷が激しい。昔は伝統的に作られてきた粘土の人形は、観光客にも売られていたことがあったというが、現在はほとんど見かけなくなってしまった。外山（1979）の推測によると、この粘土の人形は、ヤミ族の遊戯本能から作られていたという。きまぐれで作っていたものを、観光客に売っていたという過去から比べると、現在展開されている商品は非常に資本主義的であるように思見受けられる。

また、伝統芸術とは関連しない商品も多く存在する。かつては「フクロウを見たら、その部落の人が死ぬ前兆」という呪いの象徴として言い伝えられてきたフクロウも、今では島の象徴として、様々な商品に採用されている。（写真5を参照。）鍾さん（インタビュー表3）は「蘭嶼の本当の象徴は人形紋と船の目だけだ。」と断言する。一方で、現在展開されている蘭嶼の工芸品についてそれらの象徴にこだわらず、観光客の「蘭嶼といえば～だよね。」という会話の中で、観光客の中にある「蘭嶼らしさ」を見出し、商品製作に活かしていった結果、このようにモチーフが多様化したのだ述べている。張さん（インタビュー表6）も、「フクロウももはや経済的な利潤として見られるようになった」と語っていた。漁人部落の仮名Fさん（インタビュー表2）は赤、白、黒の伝統色以外に、青など様々な色を使い商品を展開している。彼女は販売するブレスレットについて、観光客に「青は海、白は平和、黒は勇気を意味する」というように説明する。これは、彼女が蘭嶼島について勉強して得た彼女なりの文化解釈だという。観光客のニーズと、自らの解釈によって商品は変化し、それに伴い伝承される伝統も変化するのである。

写真1



写真2

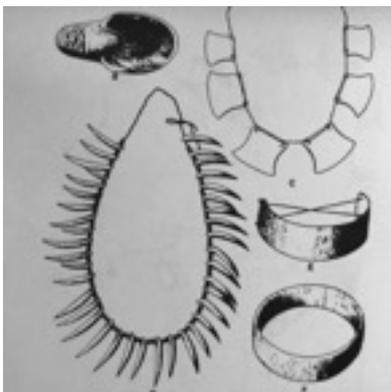


写真3 (写真2の現代版)



写真4



写真5



3-2-3. 伝統の変容に対する見解

ヤミ族工芸品製作・販売者は彼らの商品とヤミ族であるという自意識に誇りを持っている。この変化に対し、鍾さん（インタビュー表3）は「僕たちがやっていることが伝統とは違っても、それを蘭嶼ではないものとして扱うことはできない」「この工芸品店も蘭嶼の一側面」と語っていた。また李さん（インタビュー表5）は、「工芸品は[記念]だと思う。船の目そのものは持ち帰れないから、それを変えるものにして記念に持ち帰れて、とても便利なものだ。私は昔の人が苦労して作った昔の工芸品を重視してるから、工芸品の中の船の目でも、それは船の目だから、見えるように付けてもらいたい。こう（目が横になる付け方）すると目が全部見えない。」と述べていた。商品が変化していくことを受け入れ、その中で自分のこだわりを見せているのである。たとえ今までの原始的な工芸品とは全く違うものが売られていたり、伝統的に信じられてきた逸話が歪曲されて語られたりしたとしても、それら変化も、変わっていく蘭嶼の一つの側面だと捉えられているのである。

彼らは蘭嶼観光産業勃興の波に乗り、自分たちがヤミ族を代表して文化を伝承するという意識を基盤としつつも、観光客が求める商品とともに、蘭嶼伝統の変容を促し、実践した。伝統は彼らの創造力やそれぞれの文化解釈を元に変容しうる。その変容の裏には、近代化と同時に貨幣経済によって価値や社会的地位が貨幣に変わりつつある蘭嶼島と、出稼ぎによって近代化したヤミ族が大切に自身の生活や大切にしている価値観があるのではないか。

終章 まとめ

海洋交易に始まり、中華民国政府の統治に至るまで、数百年のうちに蘭嶼島は景観から生活、価値に至るまで大きく変化してきた。中華民国統治下の近代化政策により、貨幣経済の流入に伴って産業が多様化し、消費社会の拡大が進んだ。近代化は、自治制度や貨幣経済などの社会秩序変容だけではなく、ヤミ族の社会的実践をももたらした。彼らが集団を形成し、蘭嶼島で起こっている問題に対し声を上げること、また主体的に産業を開拓することで、来訪者との力関係がより対等なものに近づいたことなど、ヤミ族の意識や実践の中に大きな変化が起こった。

また台湾本島での出稼ぎも、一部のヤミ族に変化をもたらした。出稼ぎヤミ族は、台湾本島での文化接触で、ポジティブにもネガティブにもヤミ族と漢人を比較するようになり、その対比は、蘭嶼島ヤミ族というアイデンティティーの芽生えにつながったと考えられる。出稼ぎの歴史は短いものの、出稼ぎヤミ族の中の意識的な変容は急速に進められたのではないだろうか。

出稼ぎ、もしくは島内での文化接触を経験したヤミ族は、自身の認識や意識にも、また蘭嶼島にも様々な変化をもたらした。「蘭嶼」というひとつの単位で捉えることにより、外向けの「蘭嶼らしさ」の発展に繋がった。それはのちに、伝統工芸品の製作などに表現されることになる。

工芸品店を営むヤミ族のほとんどは出稼ぎ経験者である。彼らは、文化を伝承するという自己意識の傍、自分の創造力を掻き立てて、好きな商品、或いは売れる商品を作る。

最も観光客に広く近づくことができるのが、露店で行われている工芸品販売だろう。島を歩けば、一軒は目に入る。ディスプレイも興味を引くものばかりであるし、肝心の販売人も自ら話しかけてくれる。彼らが蘭嶼文化と観光客をつなぐ門戸であり、また彼らが選んだ伝統がこれからの蘭嶼の伝統として残されていくのである。

出稼ぎなどの近代的経験を経た一部のヤミ族が、その経験から自らの中に意識的な変化を生んだ。蘭嶼をひとつの単位として捉え始めると共に、個別の主体性が生まれた。その主体性がそれぞれ別の形で工芸店経営に結びつけられ、結果的に伝統文化の変容をももたらしたのである。

-
- 1 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 2 米澤 (2010 : 1)
 - 3 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 4 片倉 (2004 : 89)
 - 5 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 6 台東縣蘭嶼鄉統計年報
 - 7 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 8 乾 (2003 : 8)
 - 9 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 10 橋本 (2007 : 66-67)
 - 11 乾 (2003 : 7)
 - 12 馮牧凡 (2017 : 16)
 - 13 乾 (2003 : 9)
 - 14 住田イサミ (2003 : 46)
 - 15 鄭・古谷 (2004 : 18-19)
 - 16 土田滋 (2003 : 15)
 - 17 蘭嶼鄉公所
 - 18 乾 (2003 : 8)
 - 19 住田 (2003 : 50)
 - 20 中生 (1994 : 6)
 - 21 原住民族委員會
 - 22 片倉 (2004 : 90)
 - 23 乾 (2003 : 9)
 - 24 外山 (1979 : 34)
 - 25 乾 (2003 : 10)
 - 26 中生 (2012 : 232)
 - 27 米澤 (2010 : 152-153)
 - 28 東 (2006 : 4)
 - 29 乾 (2003 : 10)
 - 30 陳・飯田・堺 (1996 : 91)
 - 31 三富 (2003 : 28)
 - 32 三富 (1993 : 14)
 - 33 曾山 (1999 : 38)
 - 34 土田滋 (2003 : 19)
 - 35 稻葉・瀨川 (1931 : 36-37)
 - 36 陳・飯田・堺 (1996 : 91)
 - 37 足立 (2007 : 25-26,45)
 - 38 蘭嶼鄉公所
 - 39 稻葉・瀨川 (1931 : 36)
 - 40 中生 (1994 : 3)
 - 41 稻葉・瀨川 (1931 : 41-42)
 - 42 「特集 ポンソ・ノ・タオ 台湾蘭嶼の民族と文化」
 - 43 国分 (1964 : 111)
 - 44 曾山 (1999 : 39)
 - 45 蘭嶼鄉公所
 - 46 鄭・古谷 (2004 : 19)
 - 47 中生 (1994 : 13-16)
 - 48 国分 (1953 : 51)
 - 49 国分 (1964 : 124)
 - 50 夏・藍 (2011 : 124)

-
- 51 蘭嶼鄉公所
 - 52 蘭嶼鄉公所
 - 53 台東觀光旅遊
 - 54 蘭嶼鄉公所
 - 55 德安航空
 - 56 蘭嶼鄉公所
 - 57 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 58 中生 (2011 : 196)
 - 59 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 60 中生 (2012 : 226)
 - 61 WISE
 - 62 中生 (2012 : 230)
 - 63 WISE
 - 64 曾山 (1999 : 42)
 - 65 蘭色大門
 - 66 臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》
 - 67 CNN中央通訊社
 - 68 曾山 (1999 : 39)
 - 69 鄭·古谷 (2004 : 19)
 - 70 蔡 (2009 : 116)
 - 71 蘭嶼鄉公所
 - 72 蔡 (2009 : 115-116)
 - 73 蔡 (2009 : 130-131)
 - 74 蔡 (2009 : 125)
 - 75 蔡 (2009 : 127)
 - 76 台東縣政府 (2010)
 - 77 外山 (1979 : 283)
 - 78 外山 (1979 : 278)
 - 79 外山 (1979 : 281)
 - 80 外山 (1979 : 278)
 - 81 外山 (1979 : 278-279)
 - 82 外山 (1979 : 18)
 - 83 外山 (1979 : 159)

参考文献

- 足立崇 (2007) 「日本統治時代初期台湾のベンジャミン・セオール号事件に関する研究」『大阪産業大学論集. 人文科学編』pp.25-45, 大阪産業大学論集.
- 稲葉直通・瀬川孝吉 (1931) 『紅頭嶼』生き物趣味の会.
- 乾尚彦・土田滋・皆川隆一・三富正隆・小西達夫・足立崇・住田イサミ・大嶋智子・徐瀛洲・米澤容一・夏本奇伯愛雅 (2003) 「特集 ポンソ・ノ・タオ 台湾蘭嶼の民族と文化」『自然と文化 / 日本ナショナルトラスト 編』73, pp.4-97, 財団法人観光資源保護財団・日本ナショナルトラスト.
- 大島襄二 (1972) 「ヤミ族の文化と社会」『人文論究』22, pp.26-52, 関西学院大学人文学会.
- 片倉佳史 (2004) 「蘭嶼—洋上の孤島の抱える魅力と現実」『東亜』449, pp.88-95, 一般財団法人霞山会.
- 国分直一 (1953) 「終戦後の紅頭嶼(蘭島)調査」『民族学研究』17(2), pp.47-55, 日本民族学会.
- (1964) 「近年における蘭嶼(紅頭嶼)ヤミ族の変容」『漁業経済研究 / 漁業経済学会 編』13(2), pp.109-126, 漁業経済学会.
- 蔡友月 (2009) 『達悟族的精神失序：現代性、變遷與受苦的社會根源』聯經出版公司.
- 夏・藍 (2011) 『八代灣的神話』聯經出版公司.
- 萱瑜(2007) 「台湾原住民族文化活動之研究以蘭嶼達悟族飛魚祭為例」(未公刊)
- 鄭漢文 (2004) 「蘭嶼雅美大船文化的盤繞—大船文化的社會現象探究」(未公刊)
- 鄭攻靜・古谷誠章 (2004) 「台湾蘭嶼島ヤミ族住居の近代化における住居空間の変容について」『日本建築学会計画系論文集』69(578), pp.17-24, 一般社団法人日本建築学会.
- 外山卯三郎 (1979) 『ヤミ族の原始芸術』社団法人 造形美術協会出版局.
- 曾山毅 (1999) 「蘭嶼ヤミ族と観光--その背景としての中華民国と蘭嶼の政治的な関係」『立教大学観光学部紀要 / 立教大学観光学部[編]』1, pp.37-43, 立教大学観光学部.
- 宋秉明(2007) 「蘭嶼的觀光現象與地方建構」(未公刊)
- 台東縣政府 (2010) 『蘭嶼工藝家』[DVD]: 台東縣永續發展學會
- 鍾怡箴 (2008) 「發展生態旅遊對蘭嶼達悟族傳統文化之影響」(未公刊)
- 陳元陽・飯田繁・堺正紘 (1996) 「蘭嶼国家公園の設立失敗から見た台湾国家公園政策の問題点」『林業経済研究』43(2), pp.89-94, 林業経済学会.
- 中生勝美 (1994) 「台湾蘭嶼島ヤミ族の文化変容」『キリスト教文化研究所研究年報 / 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所[編]』27, pp.1-23, 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所.
- (2011) 「蘭嶼島 津波の島に蓄積される核廃棄物」『世界』pp.194-202, 岩波書店.
- (2012) 「低レベル放射線廃棄物と東シナ海の津波:台湾離島の核廃棄物貯蔵場」『東日本大震災と知の役割』pp.217-241, 勁草書房.
- (2013) 「核廃棄物貯蔵場・蘭嶼島のホットスポット」『世界』pp.238-246, 岩波書店.
- 橋本征治 (2007) 「台湾蘭嶼におけるタロイモ栽培」『関西大学東西学術研究所紀要』40, pp.50-77, 関西大学東西学術研究所.
- 東喜望 (2006) 「蘭嶼島誌—海洋民ヤミ族の共生社会」『白梅学園大学・短期大学紀要』42, pp.1-19, 白梅学園短期大学.
- 胡台麗 (1993) 『蘭嶼觀點』[DVD]: 多面向藝術工作室有限公司
- 馮牧凡 (2017) 「達悟族飛魚神話應用於餐具設計之研究」(未公刊)
- 三富正隆 (1993) 「台湾蘭嶼ヤミ (Yami) 族における空間認識と世界観の変容」『地理学評論. Ser.A / 日本地理学会 編』66(8), pp.439-459, 日本地理学会.
- 森口恒一 (2005) 「アニト(精霊)が乱舞する島、台湾・蘭嶼」『館報 / [東京家政大学博物館][編]』44, pp.2-5, 東京家政大学博物館.

楊炫叡(2017)「達悟族飛魚神話應用於餐具設計之研究」(未公刊)

米澤容一(2010)『蘭嶼とヤミと考古学』六一書房。

劉斌雄(2005)「蘭嶼行」『台灣原住民研究/日本順益台灣原住民研究会編』9, pp.3-23, 風響社。

Douglas Clifford Smith, *The yami of Lan-yu island portrait of a culture in transition* :Phi Delta Kappa Educational Foundation, 1998

Harvie Ferguson, *Modernity and Subjectivity: Body, Soul, Spirit*: University Press of Virginia, 2000

Jackson Hu, “Spirits Fly Slow (pahapahad no anito) : Traditional Ecological Knowledge and Cultural Revivalism in LanYu,” in *Journal of Archaeology and Anthropology*, No.69, 2008, pp.45-107

S.-T.Kuo & C.-J.Chen, “The sustainable dwelling development of human settlement on Orchid Island,” in *WIT Transactions on Ecology and the Environment*, Vol.120, 2009, pp.363 - 373

台東觀光旅遊「離島交通」<<https://tour.taitung.gov.tw/zh-tw/Traffic/Island>>2018年12月20日參照。

臺東縣第三期(100-103 年度)離島綜合建設實施方案《蘭嶼篇》<<https://www.taitung.gov.tw/Upload/RelFile/426/113475/d0257a36-bed9-4d68-a6f8-157233db3b49.pdf>>2018年12月20日參照。

台東縣蘭嶼鄉統計年報<http://www.lanyu.gov.tw/admin/upload/twgov_file_201710311308141.pdf>2019年1月22日參照。

德安航空「航班時刻」<<https://www.dailyair.com.tw/Dailyair/Page/FlightTime/>>2019年1月22日參照。

蘭色大門「蘭嶼民宿旅遊連戰」<<https://travel.lanyu.info/>>2019年1月22日參照。

蘭嶼鄉公所「印象蘭嶼」<http://www.lanyu.gov.tw/content_edit.php?menu=2240&typeid=2546>2019年1月22日參照。

原住民族委員會「雅美族(達悟族)」<<https://www.apc.gov.tw/portal/docList.html?CID=03AB0AFF23E53149&type=A281488B606D9313D0636733C6861689>>2019年1月22日參照。

CNN中央通訊社「中央社全紀錄 蘭嶼7-11風雨中開幕」<<https://www.cna.com.tw/news/firstnews/201409215001.aspx>>2019年1月22日參照。

Duncan R. Marsh&Edgar (Jun-Yi) Lin&Pi-yao Lin (1993)「Orchid Island: Taiwan's Nuclear Dumpsite」<<https://www.wiseinternational.org/nuclear-monitor/387-388/orchid-island-taiwans-nuclear-dumpsite>> (2019年1月22日參照)

謝辞

本研究において終始熱心なご指導を頂いた総合政策学部の小熊英二先生に感謝申し上げます。
また、研究会のTAやメンバーの皆さんの助言や協力にも感謝いたします。

調査の実施にあたり、山岸学生プロジェクトのご支援と、桜美林大学リベラルアーツ学群の中生勝美先生のご協力いただいたことを深く感謝申し上げます。

蘭嶼島でインタビューを受けてくださった皆様にも感謝申し上げます。